源氏目録

一　きりつぼ
二　はゝきゞ
三　わかむらさき
四　をみなへし
五　はつかのゝち
六　あふひ
七　ゆうがほ
八　若ちゝ宮
九　正夢
十　なゝ

一　名所かせんさいとも云事
二　ひうちをせをゆふ事
三　なゝ色すゝつむ事

内閣文庫

一きりつかといふまれのうち内裏のうちにあるほ
てんれ名をきりけいしやと云きりはかの事をも
あの事をつかにひかの源氏れは母さふり勢竹ふ
はてあそきりはほのかうねとをやはまはくうね
を一の人なとれはむをめなとまくい時きうをを
てこうやはくむまうちへまいりをひしそうはくふも
あとれかりにときめう殿竹ひ　うへ乃女ほ
かうねみやはを孫こをふをれかとはわう文一和
これかうねはくうにいてふせをふうの文三よ
をを竹ふなりのあろはくくうねくく袴さ殿をふ
やまのうきりあけまへいりのうちみそ人のかう袴
なとはる事あけきハはいやを海中ーくさをへいそ

まふせあてのちゝ海ゆゝしけせいなまいてゝうまの
せんゝを竹まて出まふしけゝ海をいゝゝむくを
ちゝくれこゝをなまは行ゝ乃あれ人いゆゝうをし
をまゝなる佛ゝさゝ利それたゝのゝとゝ葉

あゝしく　いゝ糸をたえつ
なまれさゝう　うきをゝ乃海ゝひ

梅ゝいをを出竹ひゝし　たゝみゝとなちゝ行ゝませ
孫ひゝさゝ海ゝくの事をのゝ海へたい糸をたえく
まそゝのをゝ風ゝさゝうをゝしゝ哥

かゝゝとそゝ乃ゝ海ゝくゝみちけゝれゝしゝまよ
いゝ海ゝゝさゝいゝちゝをゝゝ
あまをゝうゝのれゝさゝをのゝうゝそゝゝけゝ海のまく

なゝをふさ乃のくゝ牛ゝもゝあゝ海ゝゝくけ海
めゝたをゝゝとゝかゝさへれそ孫をゝまのそゝをを
おゝゝゝゝう船て後さゝう乃ゝゝゝ八ちよゝく城を
さをゝ海ひてゝ牛乃くゝぬ城をくゝ世のふゝ雲を
のけゝひ光ゝるをゝくて秋ふを利ぬゝのゝ世ゝ
かゝうゝ乃毋をれなゝく四ゝさゝを世のひゝしゝゝ
ゝゝや山いゝみのゝとなゝまは つまゝゝくを里ゝをゝ
竹ふ風聖ふゝちゝくゝのゝをまなるゆふれふゝ
ゝを後を里へゆ者いゝ乃ゝゝやゝうふと云女をゝ城使ふ
けゝゝを世竹ふなき人れやゝをなまをふ海里をゝを
けくへゝそれゝとゝ乃ゝしく葉　八ゝむくゝ
すゝ　出乃音ゝけき　雲北上人

をりりの　あきらふりやと　文きりく
こゝき　露はさそふ風　物語　あまいハ
かうのれさとみうのはれたくぐんしれはたあるを
陣うえこれあけをよ志川こそおりりく風所へみ
くをよりの秋のゆふ夏れつまりををさむをりの
あを祝なるにゆ黄い乃こやうぬといひし女房ハ
使よはりりく竹ふなきん人のやをあれいあるさとなを
あを津くへ義うこれくうぬくこ夏れ人くりそ孫
ま稚てひなくなり利しくを孫たこあるそふこを繁
をあるへく源氏七乃やくりりくめん志こ毎ひて
あとふん乃を由をくを井をひくう須ふるゆを
人ゆをこあをあるをれしうるをたの世わりりをる

ふ源氏のをこををう勝さう世らをりりのをの世ハ
かふも紀ふ夏うくやを紀うくくをおりりく風りり
めてくひりふ去とつけをまわしよりりのきをを
れりふ歌をんくをいふあるをれりとのこと繁
あこ津く風　四津り　七年
りのをの世にあひしとをあうらうてんあるを今の
四津りあるををんくれうぬりふをといふ事不利
をりりとゆひ　こむりをれ　市りつ歌れ
つ舟て　あけ風うを　市の歌を　志ふ
りとこふのりくいをりくこわりいをりりをまさを
てうをくりをなと津さの志を利津さふ源氏の
君十二めてくんあくを日みふりりのうちを竹をて

たく人となれ竹ふいをゆるひの御源氏是のみ
きんあくの月ひまいまれ大ちんの帳むめり
清門はれをうひまくやうてを夜皮
大ちんれもとへおりまれ是をはふひれ上とい
とくやをつもとゆむこむをさ紀と云事いうやなと
の帳くんふくれたりられ是れいやのひ〳〵きくを
まてもとゆむをとれるのをそれにませうう事を
又はふひれう人のちく大ちんひまい袴まを系をふ
を武家にるりわやかとく云事伯をそれかまやと
れりをうあまをうふまを法りゆひなをいふ事
ふ清くるり又れ巻まうくやくむれうやとり人を
ふちつかれをさ紀の事をあるをきんれまく毋をる

れをさ紀を源氏れは毋のうのりくまて後はと
おりりあけく殺竹ひはんなくさ海は弁月ふを
ともはれをくをたはりてあくにはをさうせ竹
ひてもあく海をちれたりりりまへひあり
きはゆうもさひしくたかしてかくへれ女海をちの
はつか孫くををさ海しもくてはとのの明雲の
うへもをこにくれをなとあけく殺のふ紀ま海門
のはをあゆをれめいまくおりまれをんたひのは
交はくをちをくをてやをくを名堂のをれりまれひあ
きをたりまれ袴をくをさ紀なをいうくいりき
くつをのをひしをないれまけと堂をく女房きく
出て系ら世のひくを海ふとにはれなくはまを世

殺ひとをかさねしそうわになるべしハまふぐんしを
ひうがゝ若とゝハしひめみやこやうにたはし
ませをうくやくひの文とゝまの人ゝ也はつか孫ハ
みちつかなれしこゝやを源氏ゐさなくゝ重大けゐく
ちゝ後ゝ志あゝてまたゝりてつゐに志ゝひくゐ
まい里ゐひとゝは子一人ゐてき竹ふ迷いせんゐんと
ゝせいハこれ侍事ゐ重ゐゝりはゝのみゐとく
を源氏ハ侍ちくみゝゝ城ゝ しまれゝゐ見こたり
志西ゐうゝくまゝ海せをゝ重はゐの法門とゝゐ重
たとゝ人ゐる法門えんさゐのみかゝく見こたり

二ゝてゐく　これまゝき西ハ和乃和ゝゝりはゝ云
事ゝんゝハ君侍和ゐみゝたいゐの侍ゐ

西にゐりゝまたはつ稚くなくはゐんとゝやそれは
とうの中ゐとゝやゝしハいぐんしれ侍こゝうとゐふ
ひゐ上ハはあゐゐ重ゐゐのゝ志とうまのゝこ志きゐと
りひしてんゐう人ゐ重て西乃和れつきくゝ城ゐく
侍ゐそゝまうゝとそゝゐゐ侍ゐの和ぐゝ重ゝ侍ゐてふ
人の志なゝ城ゐりゝちゝう侍ゝれゐをさゝめゐ見を
西ハ庶の志ゐさゝめといふそれゐとれしゝ歌

二のまちゝゝ　ちゝう世のむゝめ　菊の宿
ひゐまゝそくゝ世　なゝてこ　てをたゐゝく

あゝ遠ゝらゝゝりのゝゝ里とゝゝ後ゝうへ
ハゝ世にとう中ゐの物語にたまゐゝれふいハれかゝ
の事をなゝてこゝゝゝりゝ出ハゝ世ゝ毋ゝゝれ上そ

う　相撲よみて　こゝ事ども　ものうとく
毎　さて　山かの　さくうえい　月のるとせ　ものがん　なくて
をかの　毎　うえを　ぬ事　とも　ぬ　ゆ　むて　ゆ上
らういの　ものを　かの　さくうえと　云事　何里　へ　梅　ものの
いとあきしう　里　八　出さ　殺　外りん　とはるう　ものく
ふうこ　ものを　且　ものし　ものを　家人　ものいよ　ものを　ものとはひし
うすと　八　おりて　ものの　さくうえ　立　皮い　忘れ　あるし
よ　孫　こひう　こまる　山かの　てうえう　ものく　へ
やわ水　ものを　すくまを
ふとく　ぼく　毎　いよの　ものを　ものかえ　ものれ　やわれ　せん
さいな　とれを　ものろう　里　しゆへう　ものく　へたり
てかたく　うえ　ありを　ものて　あるし　ものいよ　ものを　ものい　君

のおりて　まひて　うさに　ものと　ものの　ものを　ものを　ものん　し
ものひと　女　ものう　とも　孫　うう　ものへ　ものを　ものひ　たり　て　立
きく　ものを　ものへ　ものを　孫　うう　ものと　ものろ　ものい　ものを　ものく　て　我　ものを
ものを　ものて　ものを　ものる　ものを　ものう　ものを　ものひ　いり　て　と
ものく　の　ものを　ものう　ものを　女　ものを　ものひ　ものを　ものを
そ　ものを　ものや　ものを　ものを　ものに　ものを　ものの　ものう　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
とよ　ものを　ものし　ゆへ　ものを　ものそ　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
伊与　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
ものや　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
ものの　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを

とうく初くものうふ所ふをまくまくてをはしくなちち
まを行ひしとともつ舟ゐみをあひをまくにいよく
源氏ハ所ハ所にいとに思ひのひ々ふとくやを忘乃世
まてもわをれ給をていまをけ給ふふく後あまゐあを
たりー波むう人孫く二条の院ひんーれをいよ
を後せら迷きいよのをけり　を中ー川わうりあを
いまのをやこく川　ををかたくうえゐは津く後ー
此物語よかてー二をを玉くくをとくくをを中ゐ
ゐ乃物くうりこうまのかうこゐ物語よを女乃もとへ
我りとをられやうなる人加よひ々ふををふくす内
ををうり出をふよ此う人人車ゐのりてゆうんと云を
いをををやを思ふよ我ゆく而あれハあをまーと思ふゐ

此男ふんををきく我くゐをもう殺ハうちうるをこうん
をふくを後をう此宿ふ菊ありをみちなをを々ふよ

あをと此音をきくをえなくねやをなくく

つまなき人をひをやとあ々ふ

とをこうう我物ゐうこれ女乃もとへゆうにをを身ハ
をきたりあらん女にかれう殺の人とゐの君をちに
ゐたをーゐを見とう中ゐ此なをーことをを迷を
ふゐのひくかをひをひていをあをくくうをーゐ
ゐをなき人いてきをこれ世ともゐををうをーを
うりーふかのくをゐをゐて後ーき事をいふと
ゐての後うなる家りかくきをてをーー殺あるをを
とうの表れりーくくみをゐなをを

せんうらのこさてひめ君れうを

山かつれうきかなわとをたりくみ

あを花をうけよなてふてうのはゆ

とよをを後方とかくりうへまたりとなることこと

たわ山人そうゆふうかの巻よぐんしれなふう

のかんまくこふおかてこをゑうこうな利十七乃

まきに月をたわ又とうこをきはゆうあるの世

のむをめれまとへかようひしふあるときりうまを

過ぬにきんさんしてあるこいうふとくへてくく

孫つ乃さうやくふくしてくきふうりうあてあをに

とりへまを六月のかくひ日といふりのうりやこれ君

河さまをくさしれよとあそ仏うえらんめと思ひ

てうへまをふこの女をうれ哥

河ふこをのよををあをえぬ中なうを

ひ阪まをのふうはをゆうこう海

とよめ皇とうこをきはううこ

さうふれ少阪まひこけふゆふくれよ

ひ阪まをくせをいうふかまをなき

とよをてをきくゆうすまめくしを人をうくこふ

あをくくしくむりうをこの中の思ふやうあうん

そうをうちみこまてこうりしるいとく源氏い

くまあれたんいてふうせ竹ふとうや ひ阪まをくせ

といふハ是のまくをしをたりをハてあをのまきうり

乃をたりてくあくれあくひ

うつせみ　　あのまれびとせいと云事なく
きこえまれなるかぎりあえれば時いよのくにの女をば
うんしてあらはれぬるにおもひてうのいろは
やわらかにたゆたしとそおもはるふかきうりとへな
はまれあるしいやわ水のめんかくとよ流こひ
さまとともを夜をあひをうらひむなくくうりのふなば
はんようつそいりふしていひ色うまとたはゆ
めてうの女をうりたくいまさす二三をうをまそ
わらいをそ伊勢のもとにあるしとめ出やうく
てん上をさ殺わう家人みなくいとおもこふりを
志をふ人をれ心をうらればいるうたふくるいひ
ちうせ竹ひてばまらをを使まくはみをそうくら

伊与乃をけのあうハくうりて人をくなく原たりうの
少人をつきさせのひて一車にめてうの中門よ
わうりをふみを人をばあさ明ふ人をうりきさ原と
思ひうまをうんしううまの中ふうく連て人三門
まをて投ありさなき人をちうふうを色をそのそ紀竹ふう
こまをまくむをめれ西のはううとはうの空でをうう
てぬたりそれりとのこをを繁

こ　加井海見うう　ゆふ屋こ
みちたとくし業ありと　一をう海
とをひ　こをこ　十　古　所
四十　こう
あまをばたりれしく葉にはくへあ此君こうう

てしてうすへうらの海こゆてうらをてくの海とも
みゆる所にうんしてをかまるの所りをよひいくせ
をふにうの女をうけてくの孫らをこゆいとしくきくをり
てをへをうくをあるをまいかをなーあるよ孫つる女めを
かくあくとをれかりをまをを光ををおしゆをさてかくれ
ふなくれひむをめにあひをくをおこうあーくふへをを
あまををくひれかあくうえをとをなをゆへをせへをの
名やりれなんとをかをしてをくをさりをかひくをくとも
をとうをは仏をーあくをえをみともあひ然りをを後
世れなをけにのををれこくをきと云をは色をしをくを
をきとををうをしを社みひ人をはをくをを紀とものを
はのをきをとをはくあーをくを後なくを事ゆをつけよ

れなーを事なるあーををてはこ後をーの人れゆををゆを
なりーきあををりて海り竹ふこれあと素
やりてかくうきあ　人りをひ
ゆてをれあくをとあをこありを
うくをけかをかえをを名ふこれをとみ
なれへうれかをあくーきかを
海こをうつせをとを名は海けをあををらみをかをの
あとをあるうは世みゆをいくふを人前のへ一和江
ちをうなをひをあをををてつけあ
をくあをのあくひ　ゆふを　ひ是ケを
とを事をを系れをやを而とやをーをせんをうとを
とうくうふをくをまをせのひしみやを而を系を

よりよいやあやしくなくておりしましゝ見ハきより
つかれ法門乃ほれたらくまくおはし侍しきとうくう
みそかく徒さ様なひしうそいやあやなくお部
めしひめ君乃おりしまれうち山は子乃とくたはし
飛しなりいこや西ハ源氏志ゐひてまいり給ふ
いとけなきすとよの人を思ふさてこゝもしくかしより
まふみちる条なるところに夕かほさ乾ありて里業
こい急わ保内に女房あまかさよし西くをめ示更記
うけ見え名り見そたく木々にとう中将乃かさ里し
ありてこれ姫君乃母はうくまそいさ所なる夕
く様にまへの六条わさりは志乃ひ侍り是法車おさ
へく夕かほたかは志給を見みてまいりと侍を苑

そ也いるさせまふに内にまふちんなくりの中将そ也
思ひく見よおさて糸ら世給へとそ苑をたのむ涙な
侍ふさのいとそうりしき此萬るを経乃ニ也条
志ろきはふき　あそりまとき　そらめ
ひの資　こい急　まさりけるりの
御わとくち　うちまほく　をきりけ
見らき夕かほに侍く思ふさてきんしれあり
よるてしそ様侍りとも見めたそかまとに
　おのく見ゆ秋をよれ夕かほ
いうふよ夕かほ中を人世の八王源くをはまし也は
ゆてあそ仲ふかおのまれといふ女なうとは夕かほ
乃う人といふうくて西まこい河にお保世てよく

あんないさせくらきくおりまゝ思ふまゝやとう
中ねのうゝまゝなてゝあの母うやとあゝをおりひ
なうゝあきうゝにかうひるふりとに秋ゆをおぬ
八月十五日あるつゆなるゝれのんへいきるひ
竹ふそれ秋うのこいゝふくまをふりとうを
のいゝくめさ海してきゝたんうゝいゝき
物語なとにるそれりとのあと業

みゝけちやうし　ちひゝ豊ろの

思うはくうゝををを
あまらをゆふかりの小家ゆはくをてををゝけ
ちやうゝふみ海をゝそんと我んをきうゝ世のひ
てちやうせいてんのをゝをかりえゝ我なゝをて

業ををひようへてこ海くれ世我ゝまて五十六おく
七十万歳まてとおりをゝ海ゝや

うををくうおこりのふみちをゝ海をまて

こん秋をゆのふちうたえすか

ゆきなゝはかとゝけさゝ世ゝ海ひゝふ十六日秋ま
五ゝふ孫ひゝそ海ゝとゝ五ありまををゝし梅十五
日れあつゝ五にゝう海ゝをふりれのんへいき
るひまふゝ乃くめれはめゝ海ゝ露乃ゝををや
いうふとのさまへを

ゆふはゆうひをとく花をあそうまれ
りのうふ見えゝえ五あそうあめ
ゝうをあをと見てゆふかりの上はゆを

たそうまとうさはしをうめあるとなり
なをいひうハしてすでに六日一日やうのなふうの乃
ぬんあまをきうすりぬきあうしらひくうし竹ふ
それ程の言葉　　志乃うめ　　ちうめ
つゆはひうる　　れなをうる海
あまをうるやを　　みくきとうつの海くいけ
はうるうち　　やうのううこを
こんいりぬまをいひやふうう所源氏陣ふらを
ひまぬれをもち竹ふ物はあり音ひくくをあるし
なれをらふもんはをくつけ角をていうくせんとそ
あまをこ川をめして作せあをせられてきよれよあまを
こたうを感人をうをへおなをきあうをやう出して

やふうをなきうう殘うをひ波よ知つうをて出
しうかをこをか殘あをくめをあやうをは車うの
はうへうをうんといひひ女をうのうひをは心は
うち思ひ屋ふをかなをれをきよのなを云事人つけ
たりはあうふ角をうはをうはをて源氏はの人なく淺まを
あかしてあまをこ川をめをしてきよ水まをおり
てあはうをはらんしていとを思ひをまをうを海
ひをのうち加りのひ海やう出ぬまを我れ
ふ井乃ふんをれをまをきをまをおもをけいりのふ
ぬ世あうわをふへまをとをこいう世をふ梅をへら世
竹ふ角をはかちまをへを海みをおりをまをてをみ
をこをきをて秋乃すをあみをおこたりをひし海をしに

理りあるはうこんをはいこもく御まくにめしよせ
てつか孫なをしていやを孫んあろあをくくこ竹ひて
ぢうり勢ゑふ曲くくうふをくく孫ふ女房とを是こ後
をふろうれ君にろつ世ようてあひく六条乃院へ後し
ををりの世後ハ比とのにさふくひし源氏をくう
くしむれとかりめてぢうひゆひ一ありり
三条むくうさ紀　比巻あむくさ紀と云事ハ有よ
ほゆほをていりしをみんむくうされ乃
孫よかよひろ御賢人のわうくさ
堂云うこをむくうされ乃うへとをんしやをこゆひし
あをひくうさ紀の上といふ事を書い冊れうくやく
見れ文をあさなくくよりふかくんりけくいりふ
ちくくうをありふれわくを屋こして小山よりとしふ
しておりて堂くうりのむくうさ紀乃うへを乃そを
見そあ竹ふそれあと歌　さらを屋こ
おこうろ　かちち　りのくうり
ちくれ乃ろす　う孫れ山　こちをうを
ひまひ　すくめれ子　いぬさ
みやあの花ち御　大山ぢくうをまさぢうり
松乃とかそ　わう草　ちろくさ
見う紫れ上　豊ひ孫の袖　なをのをを
大山れろし　豊ろれ一ふ志　かつひゆ
ふちけくうれくうれ　ゆめさむ御
あをれそをみそかわをむる　きんのあを

山乃やまかと論く　　義北郡領　屋形好

いとけなき　　花ちる頃　よみ人しらず

はなちる花の上をせんぢの山のはるの夜の月乃夜
と雪のひしらやのはむ雪めそ雪つかれこうや
よ雪はめいかるさ花を帰りかはゆるしく雪竹ふ
うるはちつかれこうやをきるはたのうぬよ似ひ
たり笠乃上をちはるの夜ひうちはてそ
ゆうるはかるぬの笠み抱れりの結をは雪さ花乃
くさ乃ゆうるむう乃名と云ふ雪はさ
うへと云名といふおされ家へはてそ笠とさや
それはるの三月廿日れ事也そて小山へおりて
一枝はかちなとありてるら雪ら世れまふ

を枝とるまるのへを小山乃そう法をやそしを笠北
上乃くくくこのれちのるの雪おさをくてくくうへふを
おくまを花ひくくうくさこにそくそら雪竹ひしらハを
あろうを君わつらひのひくはくはくれそう法の雪ハ
おりいくりわ竹ひ一紅よりの姫君をくくして
源氏ふは乃そかまをふ雪をんれれんれうち海さう
くにをこう立ふはらうんし海りはよ雪は資志
わさくてうあるくうの内よりのひあ君をまふ
を乃そう撥をふにをくめれ子紙うひてすく発とひ
さうくふをかれ竹くなき竹ひくくそうそ小山
ふを花すくめれふと云事を屋一又かくを雪志せん
人の云出を事なるいハあくふ屋くくはのふ竹

ぬるすめ城うすすもりはらんとひめ君乃ふ秀
さうこうれ一こゝとはさそうの姫うつはたひの
つきくるくさめ君の中ゝ詠やわ水なんとも
ひそうれすゝ又ちくゝ水いるゝと云こゝ紫式部うし此酒
ゝ君んうゝ〻を志やうし此はまい里酒ゝ此そう
まく光を源ときいひしし事を仏ゝ〻ゝ水山ゝ
物語ゝ乃山ゝとゝ云事人付こゝいふちんをかん
屋うゝ此を屋此うゝあゝ此こゝなんと云ゝを
屋屋つきくの屋さゝうに物語はゝわゝの
山なふゝ此ゝ此を屋あゝの事を語あひし
ゝゝさゝゝとふゝ此姫若ゝをこさ里ゝくうゝ〻を
仏ゝ志あてゝゝ物ゝゝ〻ゝ此ゝゝふしてゝひひゝ

ま一宮ゝ物ゝてゝ此ゝゝなゝゝ姫そうはよ乃ゝひ
ふゝてうゝゝ君れゝこへゝこをそゝ草ゝ光ゝ此一教
なゝと云ハ此時乃こゝ紫せを此九月ゝうのうゝをこゝ
ゝゝ〻ゝ穂ゝ人ゝ君の上いゝとゝの源うゝゝて事此いゝ君ゝ
ゝゝまゝこを源氏ゝゝゝ中ゝて我ゝてん二条の院
乃ゝのゝ乃ハへゝ人ゝをつ里てゝあゝこ此ゝ中にゝく
里て心さゝゝゝゝ姫ゝこゝゝ物ゝゝゝて源氏ゝす
三ゝの君乃上此ゝ十ゝまゝてゝあきゝゝさ里ゝ陣
ゝのゝらひゝゝ十ゝとゝし八月十四日ゝゝゝ紀の上
ゝく此ゝゝ君ゝゝて源氏ゝを加ゝく遠を云をとん
せい乃事ゝ二条此ゝん八ひゝ人ゝひゝ一ゝ此のゝと紫
ゝゝひゝゝふゝ形ゝゝ君ゝ志ゝ加ゝゝ君ゝ志ゝけゝゝゝ

三たび四たびとのぼらうとしまどのせんさいをもうさねの
かくしくさはゆうぐれ霧をはけわるる所　おいろはきぬ
　花をもうさねの上おもうへのひしほのなの事へ
はいかうえにおくまきのひくいまさみくときのひうま
せはすめ者ういまひとそてをあしうわひをのきぬ
とき竹ひしも山あまらをひーといひなりーうわ
なるひ　すをつむは山巻を忘れむと云事を高よ
ものーふをとも明ふ物ーこの
すをはひをふを神ーふまきん
はあはれをひうらの文とやてあるふ文おりーまー
ふうせ竹ひくはあとふ姫君一人おまていやうすう
なる海を屋ものておりーくふをきんしちつーへて
はたはしくふまはあちあとのにまはくしかの
うれおくくしてはのーいろくはくーてうかうー
ううのきーまよ似ーうりかよひ竹ひ事くやーふす
ぬはようーせさまはせ我ふーてをまーうあを迷こ竹ふ
へまとてこ屋くを空とふらひ竹ふくれふ井乃花を
うれ乃あうきゆ人ふをを忘つむと云くまな井をはか
乃さ花をはをてとうるさむふ時をかかにあうふ末れ
こをつけ者うあこーあとにふれて見こ屋見はは々
れーをあまし人せそはれこしく素　あまこうやや
　こせ　をのうふ者をむ　こ屋乃れ
いさまひの月　いりかくを見をねひあ迷
をうくまて立れとこをいうふやーのくれ

かくてきゐ思ひおもはるる事付歌

四　をみちのうゐ紙をみちのうく云々をきうる
つかのみうくをそれあるのんのはう紙はとめ竹ふよ
ちゐをすり月あれい紅葉をりてあてはうあり梅紅葉
のうくを云紅葉おれちくさまてまひ人てん上人京ちを
それきをやう考うく人をまひ竹ふ源氏れ若世いうひ
を城まひのふそれをうくきうつくをくへんうく
なーゐうく人あうくをよありけふうくてまを源氏
乃こちう竹をとう中ゐまひ竹ふをかく源氏りいあ
ゐさをておりーくふそのうくと葉
それのかくをうれ大山き　あゐさふ
かくれ紅葉ちりをく除　うかのうほひ

きくはうゆる　うかのち
あーゐくを　ゆふをうく　不考のふのみち
ちうふ海うをくをはうゐ思ゐ　かーく人の社
なちぬゐつけく　あをらいのみちれうまひ
なとうをくのふ法あをーはかのうくうの乃こ山不
と云ハかくてのとう中ゐ源氏よなーゐ吸まれやう
うたとく人せかくーの紅葉ふとくを事を源氏の
まひのふかはーゐ紅葉をくをくしてまひのふまうく
ふきみくをちりをきなを海かをうくや紀く
うくくうふ紅葉あをふきふくはまく人乃菊をたりて
左大ゐくーく人のふせちく成ん的くはくをーいり
ふもうのとく葉りたうまはあせいうひをいあ紙

うち出なくなりきられをたちぬるりつけてなと云
こゝの葉あるゐ一あのうちのといふあと歌

うゝんのうへ山ゐ山ゐとゆきとゆけまと
たちぬるみつけてゆくまとゆくへな

といふ云れは山ゐ山ゐ一あるうゝ強いゝのまひを黄い母
ゆきつけの乃文は続して源氏ふたうひまゝんあまを
山ゐ山ゐとよゐ一せうゝ人の袖と云事やうきひの
黄い黄うう井れまひをよそへうゝやうそれ山ゐ
うれゆちはゆのはをうふゆゆまひまゆふ色らを海
あとに源氏乃はみすく都ゆり一れを門を志わし
めきまゐふいなきはおゆとめて入うて玉文にうち
竹ふす一すくはくゆ井ふはうゆ世のひくは治世十八
年ゝあまをまいせんのんとをゆるひしく歌

かてこ　はゆけきゆさる
苔むをへふちきり　此世よかゝふ中れ
あまらいこれまれふくとをみちれうゆを付
うゝは巻ふある事あれ志ふをかやう乃事い白ひ
ふちうひくはくゆ一又山ゐ源氏うれ女房ふ
くんなゝれをけといひくその比年ゆ十八乃人
ゆり源氏そす九ふゆる竹ふそゝを女をたをふま
竹ふをあと歌　おやゆ乃ふや　変れふちり
ひをれ孫　はふき　ゆまやうゆふ
うんめいてん　あまらゆをけをゆふたちなを
ふはくゆ一ゆ海ゆ　うちゝをうゝをれ者うふひ

ふゐ〳〵而よりまひてん乃うさ海を源氏
ものをそこてあいまやうこひてうそ和名ふけみか
ものと乃なへしれをけひたれ乃やうにみそうひたう
ねそぬたりし而へ立ちより弱ひて畑いひうそし
竹ふけてを後りのいひたまふをうちのは方のそふ
まひさは殺をそれしく業　第四　みうらき
山寺つをくとをたかけのはくをかい
乃かさ寺つを竹ふみうちふはひんく寺ふ
ちくをはくけつりをつまてはおよを人をきんし
畑いひ〳〵殺うちのはくこのそう殺竹ふり
ふくかれえんはまさ殺のえんと云事は紀業は
りのつ乃年れを所大うちに花見のなんてんの
はくうはりまて殺のりとみてはあうひをはい殺
殺て文うくをてんと上人地下よりふ海まて殺を
はくうをひ〳〵也きんしれはこう空とう中将
業の菅原人はうと云うのをそれ後あそ
乃をかちのうれまひをは殺殺中めり出く春宮乃は
かさうを寺うしの人をきんをさうてまひのふ
とう中将ををうくををきんをまひくふれり殺
さうふはそのをてかつけ竹ふ光源代乃迷いとををぬ
殺と云所人をを殺　乃ちの世れたあかとく
云事わふへ　花あをまひをくるくふまま
をそれ和源氏ををぬへまひのやとまいの乃けい
毋ちつかわうわ殺寺をををありき竹ふなふとそ

こうきてんの三乃ゝちに竹ふり内まる女
参れなんてなくぬまてゆかん後月和よりく過そなき
雲ちひをー初よ源氏いひうあてはしん人ゆんふ正庵へ
ふりさまーをひ女房ういちんの乃むをめとうくうれ
れ母れいのうと聖うーこのめん城とうくうの女房よ
まい海人ふまてうーぼくふ皮ちかれえんを帰殺
せんとて内へ参り行ひてあるつ参さとへうんへらん
雲ひるに雲の和れ月れ不後ふうとてたとんをく
れをー後うを名れうちあるくたう後月和をのの
ある雲のうと歌　しく過ぬ月和　三乃ゝち
あふきやうかいゆ歌　くさのゝう
後白ひゆうを　れさうう　見らを

ふ後くへーおほろ市なうぬちきりなんとく云あと
歌をを雲ーほふをとをうの女れあふを城源氏やう
うんくちうーゆを思ふふのほふきゝをゝ乃三忘
うき孫にすめふをうに月を出しうひ山を れえん
のまれいひあふきの事ーめいをゝゆそう れ女をう
ゝんしふあひしゆゝに女房とをいを雲なへしよれ
うをふなる山人をなかろ庭まかりれうをと云
ほてさいくををつき孫ひをたうひよほさうを
思ふふのうまて源氏ハ正庵へのうさまーせ
ぬかろ月和よあふ事苑のうえんよあれいまひの庭苑
のあうひ乃和なんとく云ふのあをくるーうを比ハ

二月廿日きんしの帥宮十九

六　阿ふひあの巻あふぎと云事一乃まきは

源氏ナニすくろくんかく志竹ひ一ぢうさ附ひま

いまとやうし右大ちんの乃ひうふりしハこれか

のうこをあふひのうへと云人を此巻はきん一乃

法あ孫女三ぬ文賀茂乃いつきをかりわ竹ふ帥

ともにぞんしをけ大ぬ帝うあてけうふまりらまりの

それ巻まいうきはこすまく人こ目ぬ杉と波の次

さまりうの小ぬ本巻ちなぬ法かちわつらひてなく

はこのやとてやくはらんはるにみくんしれかよひ

竹ひし六条乃こうやを而やこをひくお竹ふ車乃こて

而をはともぬくあうひてこうやを而の帥車を

うちそんしなとせ一あるひうすを車ならうひと云

あるひうこみかのくてはるみをのくけとのをて

これ巻にあふひ乃上をやわちろはふあふぎ巻賀茂ぬ

事ふはくあ一さてあふひ乃上と云ひこうやを而と中

を源氏乃はこあみをぬちうめ世きりつか法門の法

ぬくこ云文すくあり一海一こ世女法ふ事をのひ一を

ひとうくうぬくまさにしてくれのひし程ト

ぬ人をて六条京極のはきまへみをこ竹ふひあ文一而

ぬち竹へをみやを而とゆ一て世ふあをんふまくを

さ海すくわさらせのひ一を源氏ふをあくゆれや

のひくちをくかふより勢ふふ事世ふかくまな

さをぬかきくなる海はんさ一おもりひはをうみ

竹ふかりの中にかくれたるうめしゐ和さ人あまたい
とゝ思ひこゝにて相はれあるとなれそれよりわくんしを
いよ〳〵ふかうたのもゆく末よ人をを毋成る
うゝみてゝはむをめれ姫ゑ伊勢乃さいくうにて下
ちやをはわしふひまつ稚ゝく伊勢へくゝりあゝそふ
車ゝすなゝ思孫さむなとゝ云ゝ旬ひ母ちゝうひて
付ゝ一梅賀茂乃まつりをは山ゝゝる海あゝうひ乃つき
の日へゝんしのはいを海ゝしゝは岩のうへいまゝ
あさなくまゝまゝ世を一車ゆては続するにつまゝより
をはくゝふゝゝ思えゝくゝうハをんしはを法ゝゝそ
ゝ歩ゝふ岩をかりのまゝゝ法りにかゝゝきといふ事
乃をいあまゝ世をれこゝを業　こゆゝをの世

ちいろ思ゝあさ　かゝれすゑ

岩ら岩人のゝゝあを又かゝりのまつりふもゆくゝ
かゝれまゝ門ををはゝあまゝ云へゝ岩ら岩四月さふ
程ゝ皮あふひ乃上日月ゝさあをてはさんちのはく
ふゝを所れゝうゝみゝゝくゝて岩ゝら大事まて
ゝさゝをのさ海ふあをしはりはふひの上はゝうか
のりいて世　岩ゝのゝ　思ひみゝゝふ
そゝあ御稚なゝを稚れ事ゝゝみゝを所れ事
あをかくゝしてあ君ひまゝ建竹ふ岩をゝきりの大ゝと
えうふ屋北日りあをて毋はふひ乃上つ毋ふゝくゝま
竹ふ年世六比を八月中ゝあをんゝ世ちく毋乃はあけゝ
源氏乃浦ふの中ふい所！あまをれあゝゝゝふ

そのやいをあらせたまふとて八月廿日まで
ゆきまちたまふともそれうひなつゆみやうの屋敷へ
をくり申ふそれこと業　ひとり孫

ちりふ草　かるさんの乃こ　みはめ乃ふ所そ
あのつ乃ゆ　ひかりふ乃ふ
色らをわうきれ秋乃白ひなんとみ付奉てさて四十
九日をれこと我はてん二条はれ院へ御りゆ所ふ御さなく
をこの遣ゆひりうは小乃方う殿ゆへを仰ゆへ御ゆ
皮大ちんれえんゆををこのふへ歳をれをを表をれは
てんふとくめをまて源氏乃をこをうの久り所ふれわ
ゆ十月の事ゆ御時ゆ御さとあまこくい海さうゆこと
をまゆ御大ゆとゆ殿をうひちゆ海こゆ所
ひふ事女をうなんとをこんゆさめ殿うは社をゆ
ら氏源氏ををうをこをなちり御をゆ御めり
なうなくく海をゆひこ笠れ上わうり所ふ所ふ
ゆ乃上れはゆけさやうこさるあまこわをれ草をやう
くれいてをふやゆ所れ笠れ上りみいまくう
をてつゆれ和源氏乃所れ乃あまこ川をめりて
のゆふすこよひをいれこのはいこ井ゆりあをれ和
をかやう乃ゆちいを笠めてまいら世へと保殿
へこ御こ川和こ殿のこそいくはうはふまうる
殿ゆ空とひしりハをんし三月一をそあうんう空
のこまへを心ゆこたち思あまこハひとりひつへん
うれたとへをもうをこうりをこうりぬへゆ上らう女れゆこ氏

乃はつめて三月なるゆゑやとらいをはる事ゝ
ゝまれもきたりあつまりきをきゝ
つけて三ゝをいを一ゐをへゝ
ゝ後くゝ人うせくいゝ世をはまくゝうこゐおさ
て二人していをうせしひう後ハ是の上よあひそめて
つゐの秋をいの乃はゐをいの乃これもち後まいゝ世
ゐあく月日ゆゆをのちいとの乃へを孫の月なまは
孫乃こをいくつとくひしゐるをそれしく繁

海くゝうこ　三月一　いのこ　子乃こ
三月九夜　のちい　ゐまらをゐい海くゝ
なと云ゝゐふはくをゝ　ひゝうさ紀の上を十ゐれゆゝ
ありをんし二十二のれ年な利は是を十のとゝうを
ゆゝわをさまわてナゐ乃十月よあひそめゝゐを

七　ゆゝきこれちゝ後を哥

かゝこゝ餐をちゝゝれちゝをきをなき海を
いゝゐ海ゝえてれまはさゝゐを。
ムをあゐひ乃まれよやゐこつる六条乃ゝやをゐさい
くゝれ下ちやくゝゐきよ海ゝわしを乃くゝみやにをこ
竹ゐ所へさをゐのゐれをゝをて竹ゝ乃伊勢八下里竹ゐ
もかゝいなちゝゆゆをゐゐてれを九月之八日乃
夕月夜をゐやゝゐさゝゐあくよ後つゝのゐくまをる
ゐ所ゝ後れ車乃ちをひやゝゐめて後賢人源氏ゐゝ
まゝゝまををのめき者ゝをちをゝゐを大ゝきゐゝて
くゝ後ゐれゆゝゐ升祢さひくゐさちのなゝ後ゝまく

よみさしたる書うら秋風ゆふに忘れて虫のこゑ〳〵ゆ
うひ書うら初ゆ孫たえ〳〵ひさきやうわう涙のまく
人をこそ書うら書〳〵まゐを世にらてに初めもくしゑ人
乃すみて乃そ思ひ乃こゝろなくたりたらんゆよ
拙こそ思ひ屋里〳〵よりあわまるまくゆ初乃こゝ人を
我なるうゝうめ〳〵を学こてはまへのさうふを打〳〵
世のひくみをのうち八乃〳〵入く物語なとゝ志のふよ
あるつゑちかくゆをしうわ海り竹ふそのあと業

夕月秋ゝそうふ　くゝ孫ゝそのとゝ井

のこゝや　まつひ〳〵　あきちのゝう

あるつゝきれわう遠　こゝ世うりちう思

秋の草　打と孫へく　あまくく孫屋出

正〳〵う河　伊勢物ますて　やそ世ゆなこ

色ら屋乃〳〵文　い世なを丹ゆく屋〳〵いまをたひ

乃そう初うさわう遠なとゝ文伊勢の事はつけ屋〳〵

八　花ちゆ里ゆまれ変ちう里と云うを

ちはかれう孫あつ〳〵ふりゆくゝ孫

それちゆさをとうつひてそとふ

と云ゆ人世ゆうゝを源氏中川乃わうりへちゆひて

おり〳〵海〳〵にみちまてゆ孫しちりうゝ所を久れ

よゝて入紙ひ〳〵世をあと業　守あゆあま雲

かゝらふゝ志　ゝう花　やゝ乃ゝゝさ孫

色らハみかゆ天月あ乃ゆ比の和あれい新云なとゝ付屋〳〵

九　正屋あ遠ハ源氏ゆ海あよ志ゆしやをゆん

はくるまかのときあのえんふあひそりあかつ月れ
のなへしれまはかさをとときめうはまふあへしれ
うこれ事やのてうらのはたくくたはくなちるひく
正庵へふうしかふはを三月廿四月それしく歌

うこのうくこ　はらうれ　はうはうおもうくみ
おもやせうう
あうはきうけ月月　色らを思れ上ふなうり

と打こ竹ふ附ふを後しにあきなくうを作を立
ら連こちく毋ふうをてりそなうつきを中ふん
はうふ後うこなくちのあろいうをそあれ歌うま
あふ前のをうかうくふはうふひまをうまていりの
年の後の月月成うを後へふはわうまなう移へせん
かうなかふ前ふ月こ竹ふにきやうこいふをりぬて
ひんうきのふとそれ程乃翻男ひふあもやせ竹へを
我なうふのめふすうつくをなかしそれけ
のやうにやせそ伯連とそをんしふをのふ言
ふををてはをらひぬとも君うあうり
はうはうこれはうけをかそら
とふこのひしうをはうこれのうへをす
わう連てをうけふふとまるりのなうを
うくみを見くをかくはをてま
変遷かり竹ふそをまへうはまそへうふひま
へはをうなるはをまの翻ふ歌へ一西ハ伊系
ひう林中網云れうこに前ふのさ連てをかうまはく

とよこくん所ちうゑ行ゐ侍う　後北山殿豊臣
里をはらんしゐまを思ふなまを伝をうゑのゐ人を
ちをたりくゐ所也をそ正庵ふこれ末と云事つけハ
山事へたひ乃家ねつゑ　くしくをあ　てう人末を
忘わすし竹ふを云歌　　あ本ハこう　御わこ門
あをの草　　松のはら　いつ乃そ
ふけうゑ　　をちをまゐいを内ハしゐあを
梅やうくゐの面ハしをなるあを逢そ正まふ内の面
と云しく歌也ふう角ゝ知ゐつめて京ハ
使を上を竹ふ所このを逢う思竹ふゐもいゐをちう
う後りよりゐの色くん是ちをこと法ふこさ法く
くゝ仏ゐくゐ白りをくふこうひてつけ角ゝ竹てゐく

あをゐの色思さゝてたよ秋乃色ハ美歌ゐ神を露けさ
ふんを正まの世ひ孫のとこひとゐ目をはまつて
四方ハあゝをきくゐてなこ学をくゐくゐとに立
くゐ仏ちハ是や彩平乃中なこん世紀ゐきこゆる
空ようゝを神ゐゝめゝはそせてゐこさ拙法ゐとも
学こ孫と海くゝをうくせ都ゐるゐち竹ひうわし
あとをひよゐ世こひさ正をまゝゐふよ我なゝ正こ
をゐもゝゝゐしそ月ゐと乃あと歌　　ともちゐゐ
孫さあハとこ　　うゝなこ　　ちちゐゐ波
なゝこにうを海くゝ　　月のうけ
色ゐみゐすまのうれ正庵ゐれ波ゝいを色法まゐを
みやこをあふ所ふせいを付角ゝこそ内ゐ所の変よ

伊勢へくだりて侍ひし源氏うくてをまふ志川に竹ふ
とふらひまはせる伊勢の使とて庵まをとこの
はるかに竹ふ事をそいひこしと聚　みちのくかと
まさはくらく久　伊勢しま　志ほのひらと
ゆいつひなきわかの浦　うきめかる海
伊勢をのあま　思ひやま　色らさこやはに
和乃ふとあと聚也かくてを年をくれてあくふ春の
はもしのこたう覚れとう中ねこやこめてはさゆふ
ふ春ともなをこひなしてかふ世れそ里を
たくうはいたふひくをまへあり　おそのあと聚
　　花のさうふ　なをたうを　めはるし紀
　　なをたうを井ふひと里
　　ふ海こ海　かくこそはふえ　ひくふ海を
次ふとう中ねふ春ふ海ふえをまわ竹ふ海
はてその年三月一日この国はそうひ志紙りんとて
源氏うこはへ出ふふ春をゆはうふ面はりて
海ねおもてるをふ志海をそうふ海うとふを海を
志海とをこ志海ふ事也そはしく聚　ひらくさ面
　　たうこ記　みの日　大海ねの方ふ里やうく
やてたひねはは和へ海のひたまへなは面はやまを
うこをるひめふ行そ海きうう賀里なさ海
ねこはは都ふ和ここの海はうひ来里海ふこて三月
十三日あのつ海ねとふ海おりまをらふはかこをを
行ら竹ふ行そねしは云りねは里こは海をこふねの

れをふうくき孫ん志ふうこあり三門まを云きこ
てそらをみとれはとをとるしいはすあ一海と孫を
竹ひ者るふゆめれつけ五面ぬんはを城やうて山浦
うをのへとのさまひ一也されを義と云事一を付る一
十　あうしは巻源氏物うへ正庵よりはを
ぬへをのうれまれと云せうの十三日れあうつ夫
五ぬきれうこをはらんをまをちいさぬはぬのり
てをりまのれれ乃あうちんから城あうしの入乃
といふあるうれ人のうこをうあんないて源氏を
ふひをきハはむくひをまいうはる也五を義うつ
うを和かしてこぬん乃はつけををあのときそとそ
をうなくはあうつ五を竹ふ入乃うこまをてうきを
なくはきうつ五を孫をの云義　むうひ孫

そひわを分りと　正庵あうしちを夫うへ
孫れ　ぬひ風　浦はをひ　浦ふりれちち
を八あうしへわうり竹ひ一事也さて孫乃正庵ぬ
ぬをやうくうちまをそうくやくりとあるせん
をいをそいーやり水目をれと孫くをりせ山庵をと
のいけ三門よあるうけ乃見ゆるかとく云しく義あり
二月に先を三月あり孫れかくや月よあれをうをうへ
乃はを義うそくはちやうれうをひうへ乃代まてあう
乃あてまをゆをりとりそなーつをを五はを入乃
いをーをうはくむをめ一人を先を表れを義乃風を孫
時小山へれんせーに人をうをうきう梅をまわしひめ

なほさらにすてゝは思ひ子ひとり子なと付たし
思ひわりしつまなんとなきむことゝもしきおもふ
に皮君をきまのうちにまつゝ竹ふを守ていましてり
あくにうつしまりてむかふにやりそまつらんと
思ふ人我をこふしかいのりやし神をあかきとや
おもしろん光の出廃する橋しる俗は御絶とれ
おしやうに皮入為を菱みえとり何人を法むかひ
を奈ら世てりさま世いりふしていひ出ぬ人きゝう
あれいつ井て我まちたゆそいとゝも俗けさある秋まゝ
那の事と二条は院宮の上よおもひしめてかすく
思ひおもく相おもまけますておもし為ま有と我ひま
あふ入たる人かまてうわかりにわとゝちくまいほ
まくめなるをこしひまをはしめのひく里は女はひき
きゝあとにこそあまをえよりしされとの給ひし
かそはこはあと緊とたる里としていひま為せたとん
そはむをめをひそなとをたくひなくひまされまの
むそあとの音をきう世なうちやと思ひくやいさは
あ里君をゆりしく御那してつきまは御かより

竹ふそれあと緊　　たるゝ色れかゝ　こまゝ

うはくみ　　たそこし宿　　をちこち

おりん乃庭となとつけなしはたりんの宿を入乃
乃むすめを庭をし亦之親乃りとおわか引あさてく
おさへり梅かくていひよりてかより務のひはむま
まくおりしたなりある秋那こひしくおやしく

秋の夜乃つきけのこゝ海よりわうあふぎ
雲井ゝ月うけまとゝきれ海やみん
空よりゝ竹ひしゝてゝそあり〳〵月清きかれこゝ海と
いへふしゝく歌をあまたみゆ〳〵にうら海と云事を
入乃江江ゝうりなきゝ月ちゝうゝる世ゆて山ひあ六月のけ
ゝる世ゝなゝ月ゝ月をおさてゝ年乃八月ふゝやゝ
こゝめゝうゝ人さま竹ふ江ゝうゝに六月よりつきれ年
乃八月まておゝ〳〵まれを海あゝれこのゝふ三
と世なり三と世のわゝまを云事を見ゝ月たひた
いふ年ゝて海りのゝ月竹ふゝうゝやこの月ゝ海
ふをいゝきたゝ〳〵れたゝ〳〵れたゝしゝて
こゝやこゝ月ゝ月ゝ海のなゝりゝふ江とらめや
ゆゝ〳〵ふゝ海ゝ海わゝ海ゆるあき

空よりゝ竹ひゝなゝくゝく都へのゝ月竹ふゝのむを
めれゝゝ海乃ゝうゝ思ひやゝふへゝ入ゝもはふゝりを
都ゝゝくまゝ月てゝゝりゝひまてはをゝ月ゝりまゝふ
源氏ゝゝくゝはゝ道ゝ月見をゝゝくゝ乃わゝ道
ふもたゝゝれなゝやゝゝ海ゝゝ海思ふらんと月海
ゝゝみゝゝゝめゝをゝ都ゝゝけ道ゆてゝのゝれゝうゝれ
はゝゝふひあきゝゆてゝふのふ松風乃まれは三ゝを
京へひゝうゝまゝゝゝて空れゝうゝ人はゝふゝて玄文の
安倍ゝゝ素月竹ふゝゝ乃中文とゝはゝゝふゝ
又ゝゝにとゝれゝゝ月とゝゝふ事是ゝあゝれ
ゝゝをゝうゝたひの月海ゝゝまゝ乃をゝゝふ

[illegible]ふおもひにて安部りんをらんとおかして
人の口よりれ出されぬ事をかなしみて
もと八思ひよらぬゆめを見くやうう〳〵明かすとて
くらす日おもひゆるしの人へとの日くらす
[illegible]おかく覚まし抜の事くらすあれ
見るめをあまれをかをあまとも
覚よりてくるを語ひ〳〵せまをらをとりしかく〳〵里と
いふこれ高なとにとりあてせて付屋　上終

南州文庫

源氏目録　并　世紀屋　よもきふ

十　かしはぎ
十一　宿木
十二　まろ〳〵殿
十三　うき雲
十四　あさうか
十五　をと女
十六　ゆ〳〵
十七　ゆ〳〵　あ〳〵ひ　う〳〵里尖　初音
十八　こてふ　ちう〳〵の宿　とと夜　聖分　浮舟
　　数その宿　まれそら
　　梅ゆえ

十九　ものがたり繫

二十　わつか　上下

廿一　うきたび

廿二　ふるこふん　あつまのくに　そくひ

廿三　ゆふすげ

廿四　みのの里

廿五　まかるし

廿六　雲うく社

廿七　ふりかふる　なつひ　竹門　紅梅

十一　為朝ゆくへしれず　伊豆の上代哥　ものがたりの事

よりてなほふるまひこそうひあれ

なほ為朝ゆくへしれず思ひそあくん

あの高代ゆんのり源氏ものやうへ物語くれなくりとかくるゆ物ふたまをうゆるものれ大網云よなれない大ものんけ竹ふいこをゆのへゆふりとれあるしゆ次戸まてかこのをちうるゆ兎乃ゆとりをさ海くをこのの世神乃陣ちのひるゆ物りめてて秋乃ゆをこのへ家竹ふ皮あるゆれ上るゆ春ゆとにあさなくまわやういるこしたくすこのへまいるゆるゆんよ

まい里のふとゝろしてあしうちまい里うま
れたるに車そはく巻ていうしふさ海なまいたま
うまい里竹ふうりゝ空ゝ金ひらひくあふゝふ水もを
ゆゝとあてとり勢うまいうれれとゝ寄里たまふ
空いゝへゝ人うまをうゝ数なゝぬ身をとてなる
はのゝうひゝうまして海りなんとけるゝりゝ志ふひ
やうに人ふゝ世ゝ飛まへ乃ほう海ゝりれ西まうう
はゝうゝ海ちかく糸まてくゝとゝゝ飛ひぬ迷ゝと
ゝちをゝゝ竹ふゝふたゝ海ゝ空ゝ
ひゝ迷ゝい海ゝ飛ゝなふゝ空
身ゝ海ゝてもあんとゝ飛ふ
空いふ仏城乃ひしゝいはようをやとつまにより
いてゝゝうゝ里ゝ竹ふゝ里ゝりいゝして海車れ
うちへたくまうる
いゝゝいゝてあふ飛ゝうにちくまて
めゝうあひめるえまを海ゝか
空ふゝてゝうの糸ふゝりゝゝゝめれ数なゝてゝひ
也事ゝうまゝ迷身身を竹くゝをいふう
をゝうゝまい里　めゝうあふ
ゝはのゝあふゝとゝいふ事をゝのゝともゝんと付
身ゝ海ゝてひ迷ゝあゝれ上巻ゝなゝうゝをゝふ源氏
邦へゝゝうゝ人ゝ飛海ゝ竹ひゝゝふゝれうゝゝめて
ひゝあ玉うゝ事わ竹ふ京ゝわかくゝと空くめのゝとなを
とゝて下竹ふゝれゝと巻　いの

いそれはひさ紀　　ときさせあ紀うけ

あまらきうれひあきこのうすれ　　ひ巻せき屋といふ事

あ〜ひ　　せ紀屋

源氏り〜山へまいり竹ふよせきゆむ〜うう

せそとやそし人のおとこのいよまけひさちのこ

くふありてくそりしうかそまてのち京へかりあ

せ紀山そあひ竹ひ〜うふ人志まひじ〜れうす

おかめ〜おそ志ひてむ〜れはんちりの小恋を

めてあそはのそれかとのしく歌

せきそ　　志ゆ川　　ゆ貴河ふみち

志ゆなるぬ海　　せ志ゆとあうそまなそこ

それたりの乃高しく歌のこと

ゆきとをとりあそせて石山せ紀や毎なとあ付毎

まくそふゆ貴あふみちをあの乃〜を

あ〜ひなや志ゆなるぬうそ

ゆくとくせ紀とあかるふあそこをや

それ志ゆ川とんを乃ろうん

源氏ハ毎竹ふうたせそを都へいまを乃りとく

とのかのをまくそをとさうねくのこ後せ毎

らそあふさうやあなとあ毎ぼく毎

あ〜む　　りきふ

ひ巻よもきふとえうすあむ〜さ紀乃あ〜ひはよすあ

つむ苑ま月そ〜見めまるくらかのうふ女をうれ

たあ〜ものまを〜をひさちのこやのはむをめそう

あそ迄うてちをしくうちよう世竹ひしりの比丘尼の
法華のひめなとを思ひをう勝れりしさまをたちく
文乃ほあと成かまを出りとほかをたてくいふうさを
なくうすあなるほ正庵わもそこのひしりを法戸
ちわうかりなひくそれちくさとれうこへ宮ぬ乃はゆ
あのきまをふむくうをはけふある家五色なんひうち
の文とほともれ人や海ことにさとゆかりめりおく
月入なふよ志ををふつゆをけうれはうき城さう
けくほともの人のむまれ事りまそたうひいう世
法むくそれよわのわまを孫をはてゆはの草ををひま
乃ゆ而こほく孫を世なをして二三年ありて二条れ
院乃ひうれしうふ事なをれうほてゆちしをわゆひりせ
うをうをいふ事りりせそのおり
乃侍舞殿うう

うしてもわまをそをはめうちをなく
ゆうきよのなのれもとのうあ孫を
ゆをきハふは　むゆと　ゆち　うさ
ちりき　あまを考う宿　きつゆれをこう
なとくを事を付ゆりこう海ををを思ゆりと云事を
をみよもきふすをつむなとにうを云事人いふ
ともふうへりれををほれ母ゆまをて源氏なをれみ
乃ほゆををを志なとを人かりりきう海ゆりをすを
はむ乃志をうかりりの人ほうりの大二とありてうを
ゆりおをひまわをつ稚てうを海ほをかをうなゆ

はるかなる海あれば行くそふ水ながれいと思ひ行くひめ君
をはまそをまそをまそらなる海よりわたる浦〳〵のたちゆも
うら〳〵千九尺ちかきまにしてもちゆへふかいとうつ
くしきありさまをかたりきかせみるよりとてあの結びたり
ぬひしかるべきこと此事ものがたり給へ

十三　忍あそび

此きゝ忍ひ勢と云事をは
源門ゆ源氏きりつかれ文乃はたてに忍ひ出る
うせのひしに乃みまそをまへせい
ゆんとゆ此文ハ八めをきるまつか乃はたの門のすみ
あき。を竹ふ文ゆそあとのかりゆはいゆをゆみまく
おりて海ゆ志うえ海くゆ竹よ海ゆ殺ゆひ乃ちゆ西
しゆをゆんゆをれと明ゆき文をおりて海さえ春宮

きりそいとおさなくおりてまいゆ此ゆ海くさ乃はたゆ
ゆを源氏よ海つをそうらひ事わ竹ふをゆれあふひ
のうハ乃はちくたゆ大おゆ殺乃はまこれひめ忍こうき
てんゆさゆひゆふ又源氏ゆ乃はひかるひ竹ひ　ゆをゆ
のはくれふいくりにうち竹ひーをおりさ殺ゆて
源氏ゆいくうをはゆゆをゆをうちへまいゆ世
ゆへをとりくゆ乃海学くゆそゆあつかとゆ海ゆを
ゆされよたち竹ふはゆなふゆをを給をを殺竹へ
をかさくうゆあゆめてまいら世ゆふはを三月世
日此ゆを大方れそうをはを海されあうきてんと
ゆ殺つかとはひうりをわうちて忍ゆを世ゆわ海門
はらんはゆわせいをやうてんれひ海ひうーふはゆう

よそおひくにのほかゝさわらせまふ女ぞうちのほ
ゝい給ふを三人ばかりいとさ給ふわんしにさうそ
きそさうをゝくさひうちむめつかゝれハくんしれ海
ゝわ正庵あり一れ二乃ゐをやうゐ出ぢまたりゐまふ
ゝわてひさまかち竹ふさうてゐあゝ勢と云也山正庵
ゐり一れゐと云事を次ゝ戸ふおり一まん時つまゝく
乃あままふゐろくれりゝふ浦の巻一ふ山の巻く
をまひをんいゆくく書竹ふ越稜ハわう席あるを
さ庵を書竹人をいりてを落うあゝんやたとへん方
あり山ゐと我りのなゝあままりひて都に
ゐてのわわ落ひく忘れ上ゝふゐ忍世竹ハさうをし
成これときのゐうふいゝさられたり忘のうへれ三乃
ゝゝみと云事に一ゆはあの忘れうゐ有利

十三　松ゝ撥　山巻まつり世と云事を源氏

あり一ふてあさゝれ物一巻ゝ入乃のむをめ名く
なれあり一成ゐすてのわわ竹ひしゝ姫君むまを
竹ひてとゝく身ハをれく三ゝをのふあまをに
國乃さゝひ乃をたりてゐれ竹ゝ笑てて皮浦ゝ
人をたてくのゝ世のゝへとおほ世ゝれを大ゝれ
正庵わ志りとてあゝれ上乃毋文升海乃あゝわ
ふ志ふ所ゐを物を重ハをゐをさまのゐれをゝひくゝし
あふふ家なと志西里ゝ世くのゝ里竹ふ幸あゝれ
れとこをををてくむをめとつまくのゝ所ふ仏のうち
思ひやゐ乃一入乃ゐれ方ゐをむすめゆもをそらま

て又三年あり。社乃うへ人はおのやうにもてな
し給ひしかどもあるかの年こゝ
なきをいたみ世のつねをなほりかの所
さまとへんゝとなりさまを社へ乃かの所へとめて
あくを思ふらんゝ所て大井よゆきて見るあ川の
わたりあれをなをたゝく松風をこゝろさゝひて古
里とも荒れをはさひしくてあを社よあまを源氏あ
ゝ城や竹ふ所ふこゝをとはふまてれ
かゝとてゆきあひしをやりいひしのひし云よ
先城うへをひとりかくゆくゆるさとに
きゝふ似ものるものゝ歌そふく
空よりしゆへ也そけしと歌 都ふかゝる

かゝとは此三世

をは源氏ゝ北里あたう城たゝく月あ一夜念佛の
はあよあり一ゝあのの大井へわゝりの人を月あ二夜
乃ちきり也あるしは上を大井よをこのひし世ゝ
のつ井てふ源氏いわゝををみあ人ゝゝ
をこ竹ふと加ゆたりゝくゝ加ゆゝ月よ二
とのちきりあとゝ大井かゝに五月一山をに小あ
りをと天事あり先を秋乃ふ源氏かゝらへまふて
迷い乃とく大井ふおりゝ々あ松りあてんあう人
きんさちあまりさい光のは つ井て丑あ寒をふ ゝまを
みふなを糸をて月のわをゝろきゝのゝをあれあひ
竹ふこたりゝをしてこやわを末は松よつけゝ

松風　大井川なを付月

きあるをとうりぶきたの殿と仰ぎたてまつる小木は
えうとゝ所えあ〜皆をかつら大井門ゐ付へ〜

十四　うた雲　此巻をうすやと云ふ所をも

雲乃女院かくれうせ給て後ぎんし侍ふ

入日さしこゝろ〜り雲くらふうをくをも
ものおもふそれるゐそまゐへゐ

此歌心ハうくやく日此歌とやのしゐちつゐ乃歌
その此歌上おきん　此志ほひくあのそう歌ゐ
ゐひ　此歌ゐ侍ゐ乃ゐ　ゆめゐをゐり侍りあと
のゐ侍いををみまて源氏年十一ゐて方侍ひくの
まひ侍りけくゐねよ侍う世竹ふ侍母うくやく日此
文ゐ中宮より女ぬん乃せんし侍そうゐり侍ひく

めてうは年可七まくかくれさ侍のゐ侍を三月ゐ
天下ゐやうあんゐ源門をはすめ事わてあけをの
色ゐうしやゐ日此源氏の侍ゐんれうう思ひやう侍
大うゐ乃世此をゐ此ゐ色ゐをこ侍ゐの冬ゐ乃
ゐ侍ゐ侍竹ふ侍ゐなゐ世はまてゐれぬゐ此
源ゐ侍ゐ侍ゐいゐ侍をうゐさゐのゐうゐ侍ゐをなき
ゐうゐて人目ゐ世大かゐ乃事ゐくゐ侍心此ううゐ
くうし野色此ゐうゐゐうハとゐいし竹ひ世夕
ゐ世乃そうそゐそゐの世なゐくゐ夕附目のゐ侍ゐ侍
てうゐ此雲うゐ此をゐ色ゐくゐのゐ神乃ゐ此ゐうひ
ゐ此よゐ〜ゐんうを雲のゐ此と云此女院ををうを
くを乃女ぬんとゐ〜ゐけうゐさ侍をうす雲と侍ゐを

夕ゝ雲乃袖の色うつくしやく云ふ事

かく歌

なと云ふ事なく侍りし天下にさやうに侍ける

冬月日比ゝまさの事ゝ正徳ひまをもとめ侍の

事なれはあはれ侍りしに行かゝ屋けふもゆかしゝ侍りけ

ゝ歌なりひくいのりとまもなりしふこの女ぬんの法

行らうそなりし海すこそうに侍なかゝ屋けの席ち侍

ゝて素堂竹ひしゝ人きうゝ思まふ投源氏乃法ふこゝく

なりしまた一さいの事なれはあはれをんよりなこ除あれ

れやゝ志ゝしめさてに侍ゝ侍ゝ侍ゝるゆんふなやう

ふてんゝをそやゝるゝすとゝきうせゝふくにより

て法門大ゝるなを法ふなてを文ををんしゆをゆ

法ゝ事ゝゝゝゝ法ゝ法ゝ侍ゝゆんへとゝ法せゝゝれ侍

いとゝゝ法ゝゝ侍らんとて堂のひよ仏法ゆひゝ法

あそ世ゝ志ゝまをゝれをあゝ乃と侍をゝゆや源氏ゆ

九乃法年ゆちのゝゝを法巻よゆんかゝゝゝゝせ

竹ふゝゝに条法ゆんとゆゝゝゝ

十四　りきゝ下

山巻ゆきかゆといふ事

源氏乃ふよゆきふゆちのさゝゆんとて武記ゝの文れ

姫君かりのいをふまそれゝれを勢しゝれり升ゝ世竹ひ

てせんさいゆんとゆゝりのゝゝへ

ゝゝたゆ乃露わをらを思ゆさゝれれ

花のゆゝりいををきやゝゝぬらん

空ようゝゆんあきかゝりのまれとゝや山さい院とゆ

をかりのいゝふまそれゝせゝを林の升ゝ賞れうち

まてをはんみうけゆ　かより　竹人せたりゆ　乃
なさけしふは　をはをまみてまくうたやさせのへとも
はるみんはよくて　屋を竹ふれ　里井　ふの　をて　を清
れをれりくそのふ一所　よををはひ　せあさうかに
をくそれなと付屋　ゆ　ゆ　はよきあやくるや源氏
ふをれかれをうら竹ひしうともあとにんはよくて
清よをはくを落して屋さふあ　をゆ　せ
十六　とと女　はきをとめと云　を大
内ふてはとあうせのふよはそす一月　をうらう
うち乃女房をそ後へ天人のをうにはあ　せて
まひ姫とて大内へまいらせのふ天下一ふ人のかう
うを糸らまらうせうんしはとめ竹ふ年はめはと
あのあまこ三月うむをめ祇出堂せまいらせ竹ふを
をはひをうそ紀見弱ひく菅源氏ゆをれり勢し
れゆ　をををのひゆ　ゆ　ゆ　ていき
ゆをれうをゆ　ゆ　ゆ人をそれをいを海を幸ゆり
思らんとはゆ　ゆ　ゆてうをゆふ
をとめうゆ　さひぬうん天はく勢
ふ源ふ世はとをよをひ屋ぬまを
とあをゆ　ゆをとめ竹ふ　ゆ　梅あまこ三月むをめを
そはまく大内をとう内ゆ乃をけとそをゆいふくせ
竹をそ源氏乃はをあふひの上はをうのあ表後ふは
ゆふををはは大ゆとやををゆひしうはをゆ　ゆ
きてあををを乃はをはうを竹ひうあり

それこそ紫をとめれかくるゝ乃俗あれいろふを非紙
張つけ給へ又はまきに夕きる寸二まくくんふくを
きへなるかうをはよりわたらは内大ちんれむすめは
ちうをにあるしうたえの大ちんの乃もとにねひうち
ふをいやをけなきこゝ張ゆをみうを思ひうけくこひ
竹ふひめ君をこの門かなくふくゝ張こひゝちく学法あて
あやなくひなの巻てひめ君をゝ我而へよひ竹ふは
なへ大ちんこひの人はれあよとう中ゝるといひし
人也夕きりる巻毋ゝこゝ乃わちせはひめ君とをいと
こなれいろまをまこゝあれ云やそこそのふ姫君ゝ張
くるゝを巻一和乃孫ゝ乃あに雲井れうを我事やゝ
ものゝゝとりの夕きをたちきゝていやゝく思ひまさ
をゝありつゝ井に巻のこゝはの巻よ仏ゆ巻く知ゝふ
やゝ竹ひくめてたを巻しゝるをそれあと巻

雲井のうり　孫さあり張こひ

あさあれ紅乃こゝ張うけ巻ふとく津くへゝ又はは人いの
なるひまあ二一本ゝ巻物語志ふを皮雲井れうり
のひめ君乃めれとこゝこゝちてゆふきりをいまさ
をは六位丸おゝりゝ夕ふ紅ゝ又はひめ君と妻文へ巻世
竹りんとてりゝつ巻竹ふ事ゝれなそやまこゝきゝ丸
六位をくとこゝふゝ志ゝ巻ゝはこゝにゝるをこゝ津く
巻ゝいををゝまくあひ君ゝ巻ふを付へゝ巻きりの
小は方ハ巻井れうりと仏乃巻ゝ夕きをにつをんゝ丸
あ門ゝゝふふ巻ゝそれ仏秋ゝを又はまれゝ源氏

六条院はわたりて四町まちをあてたるのほとり
してうちとくに女房たちはべり竹ふかく
うのこ庭をはくらまほしきまゐ南のまはゆるぶ
さまの方ぶのあけわたりのをもあめのをもいとうるはし
をうへうちはらひてあそび春のはなとさき物語はなどもて
ゆをもてあそびまはちる里とやうにしてをかれたる方まく
あの花ゆうひかうんゆちはくしなをうへうはか
ちかぶ里にうゑうへてくれをしてあつかの女房
とりをゆ源氏のはやうゑれむすめあれば西まちにをを
竹ふ色いろ宮ばうより出竹ふ深さとのうめ也山女をう
の若をれはなりはしめのうへをあきの里をかふ
うしはさてはまゆのき紅葉西はまはまはあるも
ちろんしをはのはるはるはあひくいとあうはまたりふ
ふはまちゆはあるのはかうるはたせをを
うはゆ竹ふ小あれは冬はゆきまをうはしてゆうま
の里色はれ又紅葉のはの里雪はゆはしくにをうまを
あけはあるひとあををくはたをはゆ加やうの里を
ふはるくつけあるはさふかるとはかくくとの花をめて
あくしてれの里はむ色つかのはをあるはるふあひ
なまをあとふはかはるきよ殿女房のうるはる紅葉ふ
はをこはそこに入くうへうはいをもをつけて
きふなるをは使はそ紅葉の里の上はまの方へ殿をを
ちろんうるまるはそれをはるの屋とは
をみちを風のつうへてもみよ

空よりこぼれたる風乃たよりにわれ紅葉なりとこそ思へ又
つゆ霜の雲間もれ上の方よりわけ女院乃おきのは
かなへあそれ紅葉乃はなをいとゝ移の松
城中乃をしてあそれらくるとゝ小又哥
をゝ
秋ふかつむ中をうとくゝるらん
空よりをくるのふいとあもゝ孫ふはんせかやう
乃事をみおとめよまれよ乃をなをなをれ和よ
うなたわれなゝ巻おりた雲井乃ゝ里をとめなを
まをつけまゝをいはしゝかゝ紅葉の遊なをあるひをい
ゝ乃のんまくそあゝん正らん雲れ行をいは
十四　五月ゝ　はをゝ海ゝとゝ小事
をゝまれ乃上の哥まゝ乃ひめ乃ゝ乃ひをゝ
のゝわゝをうゝんといひゝ女をうをゝ世まをゆ系
あひく源氏ゝ中たりしゝハむゝひゝ孫をゝ世
まふを思の上ゝのゝ海ゝ海ゝ海ゝ海ゝ世
をひわゝ小ゝ海ゝをれなゝ海ゝ海ゝ海ゝ海ゝ海ゝ
いのゝ海ゝすゝをゝをゝひきぬらん
とゝ海ゝゆゝ人せをゝ玉ゝ海ゝと云事ハタゝ小上
ゝ中をゝのゝくゝれゝ海ゝひゝす年をゝれゝ海ゝれゝ海ゝ海ゝ
さ海ゝくゝの人を見ゝまゝふゝもゝ海ゝ海ゝくゝをゝし露乃
よゝすゝれゝまゝ小ゝ小ゝくゝ里ゝ海ゝまゝふゝ海ゝ海ゝ海ゝ海ゝ
まゝふゝうゝんゝまゝ里ゝいゝさゝうゝくゝしゝく小ゝ海ゝ海ゝいゝ
ゝゝてゝゝ皮物語ゝゝゝをゝゝ海ゝゝゝゝゝをゝ海ゝいゝさ

まことおりひ竹ふよりの姫君の年四つにてめのと
ふつまこそはくれ〳〵へくもりやうしく打とのひたまふ
まくふかくちをくうしはけなくれひうら竹ふりとに
はめとはなそせふいさりをもひうしつきるうひ
なくめれとの打とこ思ふ今はをつぬをしこかれ
ふくかあをしをてめれとをこをこをふ行よあひひ乃
國乃ふもうふいひよりてをそに日やりしてむこへ入
せんとはそ〻打ちかなしをふ分とふ二三人して
とくうあへく京へのかせをはの世をれの宮はの年世之是を
はくしのかをとと云也はく人ひてのれをやををうん
打ちてをやふをそのかから殺をまつるの宮西遠を
はくしのかれはふまをいふ形り　ををら

かくてうらんをつせまくゆきあひ源氏ふやむひ
ゆきをそひふくをの乃大打乃ふれくをふをうちれ
内侍のかをうけ竹ふ西ハ京へのかりてやちくの打く
をはせへ来ハ竹ふ西ハ京へのかりてやちくの打く
ふををんしをををりをりをくふありて
をををふ袴をりとりれやうにかなしきふ佛の志源
をたのまんとをつせへ来宮の人源ふうちんを来宮
しりあひをる世をそはくしのかりにをつ殺をと付
をしあの姫君れあをふ名ををりひあと云也又きあ
くをををと云ふをををををれをを人ふをを殺月のををふ
ををんしれ源くをりを方〻へ正月のをやうをくを

くりわ竹ふ笠の上に方へてんあの色にきあはむをめ
乃なりの上乃をりの姫君に孫をはつ小袖
花ちり里に かさへはかさ色乃きぬ来つむ花の方
へてやあきうりたせうのあまに方へをちなし
色をきあくをりと云也巻ふあまをとそはく
乃ほりをちや赤なとゆをつけまをいきぬ乃事を
いなんゆをむあつくれか井乃色ふくかとく云
又巻なるきぬ乃をに今やういろかとくをすを
きりうあひとやあくりたりかとあと水色
乃をもしせかちやうに又あれかやうと云へいあやう
いろはあうをへと云ゆるし又を孫りあをうう
をへあをやをうをちうをひく君をうへうりゆるし
をとあをちに笠をりあをうにたりゆをと云んや
孫りあををいをくあくをちよくに絵あれゆるをと云
也行ちくり又と云事いをあひ一　初音　以巻にあ孫と云事い
あくひ一　初音
あくに以よいあるひあ君い笠乃上に以ふあるて
おりくまを也をある事をあくてこひしく思ひ四月
一日乃ほくをへあをなあ
年月をまつあひの逢て山ほ人を
をふうく花乃をあ孫きうをよ
笠ををてをを花也又巻に以松の枝よ以あを付をまハ
又巻乃松をひあこ計をりちふあ松へあるとくを云
事ををへくあ以巻にをああれいを井乃りちいを

えへうくみの事也思の上をもて源氏思をのひし世
うをうりうけぬるいけのうく思ゆを
代ふりおれけそなくへふ
空蟬し世けんなと云く初春のいと升なをふ付角
なくゑ二　てふ　花ハひそのんきう
乃ふさ紀ふくいうをやきよあて序
とをやとていのめきうを仁王経文をんしやや
世いふ角　ををやう乃うめよ投六条北　うやを而の
清むをめさいくうは女清を比ふ紀よ五く中文花
中　は文源氏のはやうをあれ六条の住里へ出さ殺
竹ひくれこ角を清をつ升てふひくさ紀乃上備ふ施
をくせのふとをやうるうを殺ふそく殺く水

うめふ清くう山ふ幾殺を五く中文乃は可八まいら殺
をふ哥世けふをいを殺をくう世をふ事ハをとめ紀巻
ふは角さくく乃てんうを住里の行り世中文を秋を
ちめ竹ふとをみ乃秋ふうつ殺を勢をふ行りて
ありくそのにれを殺くる殺しうハ表をまさ世竹ふ
孫さ見ふを角乃は思紀上のは世ん思をを紀れ殺
角中をくり竹ひしせさて世きれよけふ二紀
ふを清くまを住角のーをあをーせふあうひくを乃
紀なをいふをつけ角ーを殺をくるの事殺り

あくひ三　あくを殺　世を蛍と天あと紫文
くを世て為殺乃をこの殺かうくそ
いふゆをまさ殺ありひををくり

この帝は北の方を思ひ入れ給へる
つき竹ふ程よ大上大王の御子源氏の君
無紀は乃ち式部卿宮をとゝきこえなく　仏ふけく月
四日の夜ひとくおりて　光る源氏を見たてまつり
皮ぬかれたる心地をなんとうの見せていやくんを
はくさんまやを目ちかに光をかゝやかせ給へり
きらゝかにひゝふはくうて　ひとりを　さと見て
かのうふを　さ様こんせ　かるとうれちんまうに
ちをかりて　女はかうを祝ふはくひなを云ふ
山ふ物語よりそれんまやりれうのちんまうを
せいとのはをひたれ　山無紀の宮を
むてひまとかくまりかあるとと云事なりをあやめれ
きちやうのをきうけなをつけ

あるひは　とゝ物の山　山をとゝかつと云
事をうゝれを　ひとへやりて西北さいふ正殿世
竹ふまむ　面白はたかさめれ時物語ふ山姫君
とかて　ニかに　ふ　ひて　波きてはめて　るを
はれは　山陽方北遊ふを　百ちの本をはう人にして
うゝや面となて　ことれ色をはくてうへ　世さ紀
みさまて　百のれをうきをあめて源氏の熱波
ち　発事わそ　ケを　乃大　ねのいまさ中ねとやをし
とうを紀のをりんれうこ　宮とう中ねなといひ
かそそれ　乃ち　ちに　ちはくに　見をあをいり
ふなとはまへまそとゝうへしてあうひしあり

なてゝあと云ふ事あるいハ川のゆかてしこれ
まさしきしるなを付給へりをむろうをくる
ゝ氣まゝ雪をなかめ乃ちれ事なるべし

なるべし　　うゝ里史

これまれ玉ゝ里史といふ事を

うゝ里ひみたちそふこひのきふ里こそ

ゆゝしきあまさ所あるひをゝ

此ふをむうゝの云城源氏ふけくいうふせま
とは仏ふかゝ所はそ夕をゝしまふ山はうゝへわさ
ら世ゝくはあとをゝへなとゝ世ふに月あれ
まてはまへ乃所水に玉くゝ里なきゝ世ふひし
此事あり所てはあとをゝ海くゝ月てゝ里ゝ

ゝまふうゝ里ひとゝはうゝを
あと乃まくゝ　こひの乃ふ里　秋乃ゝう乃
なと云事付給へ　　ゝをむうゝれるれ
思ひそかくふおむうゝ　なとものやうふはくゝ給へ

あゝひに　　春分　　此巻節分と云事此を

八月ゝ大風なとふきてはハゝを所ゝつ井地をい
ゝふかゝりなを上きちゝしてをさ海ゝうゝ世梅
所子夕きり此大おいまさ中将とやゝゝ波あゝ
うゝ八風乃とふらひふ海うゝ事世聖分と云事
はゝを大風とんはをむゝ　やゝ不ゝ事世ゝ花なと云
給へて風乃あゝゝ夕きゝ里此大ゝ雲うの雲井
のゝ里此而八ゝを海ゝいうゝ乃いうゝ此ゝ

乃うをやうゆそうほうやふつけてをれ哥

風さはぐむもくくをぬらふゆを

わをぬくまなくまなくすくるあ君

はつ雪ひのまれてをんとれくやむらくを

ぬれうれやうもくさめなを云事はくあ一あのゆを

まそくを井乃うりをうしくゑまき

なゝむ七　みゆゑ　はきれをゆきと云事

をすゝ二月ふゝ四ゑう大をゝ野ゆのかまのきやかう

ゆをうをあそをゆゑとや　ゆゑ　ゆゑの

ゆゑ　をゝ

ゆゝひ八　ゆちをうゆ　ふるあと　云事をへ一

をのまれゆちをの海といふをうゆ

はをまをゝ乃ゝはゆをゝやはるゝゆちをうゆ

はをまをゝうけよゆやうをうをを

はんはをはせゆゑうれをんをくをむゝ一い源氏乃

はこをうとせあふひ乃上れはあよそゝ一ゑゝをゝ

はむをめゆゑはんをくゝをはをくゝをを大上大をうの

いのうと源氏のはをあゆをはをうとあはふひ乃上

ゆをはをくゝ也さををゝうゆゝふもゝをゝれ大ゆゆを

うをまをゆゆゝまを年はをゆてゝれのひゝしゝはゆ

ゝゝをゝゝをゝれ中ゆるゆくをき竹ふへをはゝれ

海ゝゝれをゝをゝちのなへゝれゝをゝふなゝをゝる

へをゝまくゝ四くゝ乃はさゝめはゝ四のはゝくゝをゝゆ

ゝをゆゆゆゝゝてゝとくゝ重竹へなゝ云事ゝを

永和法せうこの井に植よ中ねおろうを加永うけ
思ふをあるさまにうハ法使まくうちうわ素皇て
とて月花のもと八そ志乃をう出てゆちに苑の
いやれをれ袖を絞みをは内へ井入くに山あを遠て
帰をひまようこうたまにせうまはゆちをう岡と
ゆうをいとこれなりの袁月乃つまなを付為
おくひ九　まれをら
これ巻まきはらといふすを尋
い海をとてやゆうまを思ともうまねをん
まれのをらをわまををはるか
に山れんを玉の法乃巻よひあくゆ後の大ねかよひ
ひ山うハもの小に小方ひうさ記の
岳の上に山ちく巻新ひ乃文也ものの小に方ひうさ記の
上ふを法の孫そうはかゆちゆ岡とあるおりては
をのくあよ年月やわこめて仏事よつけてもをへ
なるゆにおりて海てはゆ中をあこかまくれを
をふをよ玉乃に月ふこ思ひうはをわてかよひまふ雪
ゆ記ゆうしふをよ要なるに出立くわうり竹ふよ
まへ乃をのくあやちうさ皇ゆん尖やものをへを大ね
ふうちうけ竹ふいよくおりひうとみくうさたえ
ゆひ山うハはちく文に久ゆ竹ふ時をゆ十二三
をうわやゆ皇竹ふ姫君乃をくうへふつまをり
ゆふとて文君乃つまにしわねひまきはらの
ひをれをうゆへ記をを色乃うをふに山あをう巻て

かうひのさたまて申いまてなくくゆゑ
ひ〜ありまさはらと申ふ事なりを
　　尖ぜうのそへ　　おもひあまぶねの城
ある軍へかゝる　　なといふをつけ
この大将を春文乃沖打ち天下はうこめよかの竹ふ
へまく人ゝくおり〜そ所色くゝ海をひ市町のをたり
色物語のおもてふをけく海といへ里梅もとの
山北方海り孫く後立うゝ北内伯乃うこをむ人
丸く沖子はあまのさ出ぶ世ひ〜世山ふうゝい
源氏をも〜発をまてく人北を海をけしゝたつ丹よ
うかりひきく孫ゝ〜をさまを竹ひし事ゝ
をうよあそ命〜けまこ又〜を紀乃ふりんのかゝ世
かゝし人をせ川をう劍乃大らうあ竹内伯のをふを
あよ理うはめをうくゝ北ゝてをいぶん絲こく
　　行りふとも君をゝ〜ふ紀かゝ
　　いをを河三川乃いろし乃を孫へ
空よをて吉わ〜うを立そゝ紀をはいを
を河中ねといひうをき乱事あんとを海かを世
ふまを山十七たまうゝ北あゝひあり
十八　むあうえ　　山まれむ見かえと云事へ
正月廿日比源氏乃行〜六条ゆんをて原ふ酒あを世
を西遣へ海うゝ北をゝ乃海むすめ妻文よ来をまふ
せんさいゆんと中を皮あきうか北れすせ投さい院
源氏よをゝ後北をゝし人あをこ北はかゝ

ふるとりを花ぞ散りぬる春の山
たき物入くゆ煙れ松乃松
たきものの入てむめを忘るる
いとのさ海なるよりも世ふ
散るを花なるひやふとい
忘れ給ふ一ふ世れ春ひふ
花のうとりめ松ゆとまり孫と
うりん神りあさくしめや
とあるー所ゆたふ物といふ事ふ歌の松ふ
らまし文なとゆくゆー所ゆてを松ゆる分兵部に
乃文ゆたんしやまて方ふれたきものをう孫見ふ
たふをのくゆて梅花をうゆ思乃上合ふまふ孫をう
ふかえうれをうはかちゆふと
志ーう源氏あり勢ふいつまゆ雪ちくふれを
ゆし中ふも梅花ハをれのかりふあひをあるし孫
とさをめらまふはこきなと系ふてふ竹ふをうり
ふれふたを物ゆをう竹ふこやれ哥
これのう紙要なるうね神ふ侍してゆ
こふをあやまふとん人やとうめん
宮五は色事源氏の文ふ源車をる程ふ思ひく
めぐるーー宮古はく人をまちをみん
花のうーを紙きそう人孫をこ
とゆのむめれえをふたき物なをこの高れしく系を
ふあんを勢く付ゆーふ系物ふ物ふあはをとふ

車を夜冬ゆかせまてうつむるをそれをすほひ
ゆきさうひてうつむとんはの角ーわさとのーとしより
おほ水にうつむせはは川水よなる角てなとく付へー
くりをを投巻ゆ月をたわいはをまそを掬ハたき
畑ふはくへー梅花をれハ世をあうえといふを利

十九　みちはうう巻　はを波乃うう巻と云

寿ーお雲井はしりの姫を夕きりのえん祝れ苔を重
思ひをあて年城ハ陸奥ふひあ表れちくれとくのゆ
敷しはハうをしうさそあるへまにあるへ孫をゆるし
たまりんのかまくはくの乃はは家のみちの乃はりなる
ゆゆきうをいきさ中はるこるーをよひのひふ
角うてあえ竹ふはあうひあくはりのつゆのつゆてふ
数乃うう巻と云ひ竹ふをあうをりん家

あさ日さしみちはうはのうちをけく

ちとーおもくく越を角のまん

雲ハふ家はんかをおもてくひちふやわなんのう波
あれさうハふくむこにとわてこはをまをめて
う後ょ三条上とやをあのの雲井のうをはは事とあま
なのはよをりてお竹ふはをゆ月也はりて行角ー月ゆ
あーの乃はたうはれひあ巻を長文よ条をを竹ふはつか孫
むーはきりつかうをと源氏角乃ゆうのはは
はりを孫角を源氏のはさうそくを也をけいーやとやき
はを巻ーはりてりはりそうあるーんあまをは文をちの
源毋をく一文をとうくうゆふはりは竹ふあーはは中文

とさぶらはるるを加くてさ幸源氏乃れとく法華
三十九まて大上大皇う乃々んし成くうゝ六条
のんとゝゝふくゝ牛をきこめ竹ふるまゝき事
ゆゝあゝ孫は学ゝ人ゆゝり竹ひゝ後あれ
たりてゝうゝふめてゝゝやうてそれ秋六条のんよ
法華なゝ竹ふれゝゝ々きるいそのあいさい春うゆを
れをゝゝ成中納云よゆさふいれをまてをよ後こひ
ゝゝふ事せゝゆ乃れゝ後るゝをその比ゝ
陣あよゝ西ゝやくのんまてあゝまん上ゝ人
こうゝゝ孫は六てう乃院のゝゝまいせいのんまて
あゝまんをれさをるやう院ゆて成をひきゝく
大ゝう大ゝんのれさふゆさ村ゝ法をれ成されしあ
いりくとそゝゝやう乃法をれ成されしあ
あやうれるよくくん的ゝ

世　わうあのうへ　比巻ゝゝなを云事を

ゆゝゝれ内伯乃ゝゝひけくゝ後の大ねゝ小北方まて
いゝしゝゝゝ文二位殿うあ竹ひく四月ゝ三日ゝ
源氏ハ法方へ子母北いを升小重竹へをあゝひ
ゆゝをゝ殿くゝまめてゝあるゝゝ小ゝゝれ云

わゝ巣ゝす聖へ乃小れをひよつきく
ゆとのいを孫をいれ分をふゝれ
法をし六条のんよをたまふ
こまゝゝすゝ乃よくひみひうまてや
聖をれわゝをゆを成つむへよ

宮ゐをかりて竹ひろひ山こゑ海ハ源氏のはつ月ゆん
孫ふくおりて海をしていを井の人里上らうを四す
乃年よりすにうつ宮て海門ゐを大かうを
をたをこなしのふ宮をんし竹をく乃一めん一家ハ一大事
ふいのりをしる事を見にしわて四位のうをはを
ゆ宮ふゆ人あれ子日ふよそへくゆて海たり
子日と云を正月ハ月ハ聖人乃あうひすわうなる
をうふそなふ海東宮を見城わゐのあの海とん位
為宮そ行へく内位かをを見事わ竹へをいとかと
ふ孫ひまを里そりのくしく見るひ海里さ海
宮源氏か見竹ふ也ふとを為宮ふうをなを竹く
為宮ん山ハ年ハけあれよそ乃をを海ふと

ある為宮そ山巻ハうを小玉玉に系里落ひし
ハむを山ハ為なをハおりてわうを生を竹ふ
めそたりを事世見をありにとくまをし
入乃宮をゆのをる宮よ海こはをうわんハ世ハ孫
うひい海をみう思ゆを山ふもをを海やとそ竹へ
を小ハうを八をを海くとふをうをのかせをわハ
人をハいのりををををふ宮あそをを宮ん文
を海ををこふいをををうをしこめて宮る日源氏ハ竹
しををそ和ハれすをうをまいををいふしく系位を
ハをれこハおりをうを人を海うんとそ思たわし
ゆめをを宮を宮ふを入乃ハ竹年ふ
をりを里いをんあのつををうちかくををにをわ

いはそそのゆゑをうけて
をしまして美の物語ものこにうまれ給へりいとふを
美語に付屋一ぬ石乃いを屋と云事をへ〜又を比女
三の文とやをし〜をを西しやく院の姫君をくあり
まひあまをこのはをふ院乃はいとをしみをてぬんの
はなを屋をれたりを移あ川うひはに〜ぬをあ和て
六条かんの院をのはを年の行也をそ山をの下に〜
をれ乃ゑかんれかに〜にうれかをしくをふ大ゆうを
ゆひ〜人也いに川こを源氏ををあひをふ光をふ人
あををあふ聖をすをををなひをふと心ゆへ〜
ゆうかを下　をを遠ををうをのいを移あを遠をれ
なををく移ゆうをのをれを源氏をををへ糸を竹ふ

ひめ君を文乃をを海うはけをふと云はうみやふをく
とうくうにをを竹ふはを文の春文はくを井ふはうを
竹ふをを遠をを西しやくぬん乃海をををれを世〜伊
事ををををを乃はを神れめくをはのかををれを〜て
を文の上あ〜〜の上い毋れをまはせん女はてんをを
ゆゆ〜めはををふひをつ移を糸を竹ひ〜ゆを比を
十月廿日ゆををそのゆを行れをく歌　かを遠をうゆを

松ををを屋をくをををををををひ毎をを海
かくを　神をを　見みゆををんをのゆも
ひをすをを〜ふをを〜れを屋乃を屋をををあ〜なふ
を比かをを海見やゆを比をを思ひ出〜也んは
く付屋一ぬ毎を皮女三文をを〜をれを乃んを

事わく思ひうけ考うかい上れ妻のすゑ所うとゝ六条
院まくの使めふくまはれをゝうきみ此御方へ竹ふ
ふ所まをを文乃かを世まふ孫こを以りをとも志う
思孫こうゆひをうまてさはうく見所乃内へへく
所ハけを之やをたち竹へ孫これつふまて見所を
あきてはをうこ見こ竹ふ見を世 いうらをうこと
いゝ そのたりうまやまひとあをつ身ふこれ文所ま
ふをいうさつうふゆー竹ふゆくさまーふ事也

妻のくれ　こゝを乃世　さちをうこ

めやのをーら　なとを所ーうてゆりんのを

此君乃めれとにこ志し女房さ所たより

あををうこらひうりくゆこを使りうれを乃云為

こう賀ふをうう城見けうまひくゆ乃ーあうゆてそれ
ふりんちうひーをなとくうさ使りいこをうこう
思ひふう思かちうてあふかあくーかとくりう
うさて也事ふ所うこ所世かけくくとを思ひふうぬ
事へかくて伯法ふ世ふら遠をとうして所ゆふ
ふゆ ふ所を世月也をあろ見れふ屋を竹ひを大
ふゆふりくを乃ゆんをうらふ いてゆ和はー海
世をふをきひま使くまをあをーふを屋うて
技技ふりをうみゆふ西遠を源氏乃御子とかうし
光をふれゆや海を竹へを見の上れ事ふ所ー合くふ
いのふりんはふりくくんくるーを源氏をれりを乃
こゆやを海くをうれを海くうて后竹ひーふをうふ

あそと世の中てはめを見あを勝ら迷はれてうませ
そは狂乃とたえをうゝみ竹ふ空はかりてなくゝあ
竹ふ狂ふいとあり京はを夕風吾くむゝさはの上は
はかゝへ海り移りんとを志のへを女三宮乃はふちり
移りゝや和歌ゝん月まちてゝと云なゝのをを
のゝまへはそはまふをみんとゝや　一めはといを
歌ゝてを和をとゝまる竹ふはゝ移を和ん高之
夕顔とハ乃をとゝノハし月まちて
人まわりせこそよ和をを見ん
空ふふんせそは歌とゝまる移りはを山乗ゝゝ迷
さゝまといとかはりはてゝはさをゝみわとはは海
竹ふ源氏のかをかりをはとしうはふはは陣

志と孫の下にみゝをはれうはやうふ者ゝあこを
海やゝゝ和歌ゝて侍うゝ見なをはらんはる所まゝ
見ゝの人を海ゝふへゝくをあゝ思ゝの中網云はふみて
ゝ海さゝにあひをまて侍き　ゝんくゝさをを
さゝくゝ空り紀あゝり
うゝこゝゝかゝゝ者ゝ文のゝ源氏のはんは
糸見を迷ハをのふはゝ者をん侍海あかゝなをゝはて
文を見ふふ海とゝくむをひ　一をゝこの
源氏ゝゝ移て後文ふとひ奉迷をいをこそはをきゝり
移ひ　一狂ふ志と孫乃をゝにはをこゝはをのゝへハ
ゝ者て者ゝはるふゝ川くふゝあんゝくゝとゝ世を
者ゝ海なゝてをはをつゝくなゝ　志と孫乃下

みとりこそやうのみ　ゆゝしき

なと世間一般種源氏を人めをもわまそつ丹ふあひ
ゆゝしき人志遠ぬ清水中さこそと浅まくをあり
さて投女うく堂云事ハ女三ゑれいまさうゑりんの
うしをあてさまーさ紀世ゑいせをのんのみすの内
加をはおたちたと光をふへきす　るに丹ゑを
ぞんーよ清うさふおうーませハさうをとをあゝり勢
をふらんとはうー清こせハ内ーー実竹ひさうと
ようそれを紀事うて、おうーはせをはまへめて内而
をかとやうをよふひ分ゑゝりー竹へをいやゝ心内
てゑゝひやうり竹ふをうをうへうへうへうへ人り遠と
か光竹ひし形り内ゝ清ゑ清うんとて妻の衆かさく

我よひのひくはうくはりの見を女かくと云世々をうを
乃大ねみをれかをて内あをはをうをとゝ乃へく家を
竹ふ女三ゑをきんれこをを女清てんハ帝うのしくあ
うれ上をひて源氏ハ帝ハ帝ハ帝ハ帝ハ帝ハ帝ハ帝ハ帝
きり乃内ゝと竹けゝ清のゝ大ねゝ乃内ゝ五ゝれをゝ
ゑいゝさあさ形をを程うて内ゝ世竹ふいうををくく
とりくゝゑれをーゝし源氏のゑ　ノふををさん
乃あと世をれを内ゝゑ方ゝを女をうゑも内ゝへ
竹ハうをしゝ女三ゑをーつをんをゑ乃上れ三の
ゝゝゝの一見世をて内をうれ内乃をゝ内内我乃をきを
花ふたとん竹ふ先女三れをゝをを二月十日ゝゝ
乃あ我や紀のわつゝふをゝ初ゝくゝ紀乃羽内

ゐをうひきゐ給へ〜あへらうふ月と竹ふいとゆう
のたとへゆもいたく〜をたりひさうの乃かそかのに
はく〜をたたかりうく〜まてしとにやゐきのいをれ
さ海ちさ里ゑ乃上をれかをさ海ま〜くやうふいあ〜
海かく〜あうをうをまかひみち、花といたくさく〜
ゐたとふ海〜まるのあけかのの　この海ふかゐ
ゆゑかをさく〜れしう〜ゑそうきをあれさ海なる
女海乃ゑハこ堂のさゐきしまうさつ〜みなゐ花
なくさゐこかをうゐ　ゐ乃くちしてふかてゐ月こ
竹ふかく海中ゐあう〜れ上をけをさ海へくれた
海う海かをりをつけくゐ月まうをふさちはか乃
ゐよれゐ堂ゐ〜れかゐ堂ゐちにさ海れとうをやう

れのたう海〜ゐ乃ゑと孫ゐふ門うをゐをひをを
うちゐきてゐをゐやうふ海うひあ〜うをちをと海
をくゐかをゐ乃ゐハまをを八ふかをゐをものにかかて
付海〜又ハ巻よれたを氏、こ云事を乃を女三文よ
うゐりんのうをあハをゐて海ゐうふれかをふゐかち
竹へハ女二乃文を女三宮よをあ孫をう海世をれ
すちを形ゐゐらうの乃ゐうゐ　　やく院い
山乃ら八海くれ海〜てうう海をう海勢竹ひ〜ふりを
女三の文を八源氏よゐひし世うゐゐんのかをれ文
たとくを文ちを乃をを竹ひ〜ふハ女二乃ふやを
ゐひし世ひみをきて女三ふやをさを形と里を海
ひ〜ゑ〜堂ひをくをを堂ひをくをを形と

り給ふ　うゝ　おとゝ　おとゝ　ゆみ　むろひろん

名をかつゝ　ふかさ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

宮ゝたりけゆへ　ゆみ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ことにもめやうすりたんせ　人　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゆひしまりをりくおちくた　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

古一　うきぬ　山ぎう　さと云事を

ゆつしいうんかくを草　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

りんのさいはうゝかきふよそハ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

云也ゆをうくよめ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

やまひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

たしうる事　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

さけをたゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

んのれふよやいやゝゝゝくかちうゝみゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

うさまのたりはんちれ結　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

いゆをとそのうえんを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

うん思ものいのうをさん　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

宮中　女三ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝちうひくきゝやちゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

おりひこかゝきふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

とゆまゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

うきふたまを事ハやまひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝうゝ竹ひゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝかゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝ竹ふつ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝまを竹ふゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

いとをしき法師なりけう紀志州にまふかりしに法
なちきは御にをたえされ是より法をのく前ゆ人也
まてふくさま母おもひてかくれつ外てふと思まひ
けしきに個をのなくよくきさ法ほ談まく法師なりけうさ頭
思ひやりてちくのんふ中さ様なひく法くしたまし
竹ふ也遣をけくるれ大納言よ　くやまひおもを
まそあよ名わくるまのおわ夕きるまれ大ねきりの大
みこんのいもう宮むこ我うし貴升乃くまれ皮いをも
うと世おもかくるましうハいよ世葉わてさ海く
いひおきし世りのは車わかうをそうさけし云
きう世葉わけるよねやをさきちを思ひて女三宮
をなちそうしよくおまね皮あ君いかくしをおもひし

ませそ源氏いさあそ遣りおかしそうしつ第まふ
いの乃い王升れおかりの夫君を源氏うさいうきさそ
宮の法そち人のはまあひさにさしるをそうよ
世の世のうちさまでし也人とそく
いくいそ孫の知をあさへん
と乃法ひしうハ宮をいふうさなくなうつしをんう
おまいくひまかしなふさしそれかいめといふうり
さてしそ岩孫乃知とをうしそきさみ見てまきめん
乃かくうせし比慶世されを父のおくおけさのおよ
本れもと乃志州くふぬ遣くゆのさ海み
くはこれあうとさくおち給のれ
とよかしおまあ遣らをよ給人こつけ給し

いと孫乃松　きふるとくらべ
たゝの世のゆきたるもの　いのれいと井
のゆる思ひ　うたを紀ゆきの屋

古二　ふるこふん　此巻ふるこ姫えと云事を
うれうるりんの乃うこれ小の方行らを此文をい一条
の文せうるをんの乃かこうを粉こ　、祇ゆ思ひし
かこをゆれ夕きりうの一条宮此あり毛に侍ふ
れたる侍こふらひゆをくくわさらせゆふりこん
をこをこ孫ゆ紀よゆ八月前のはのあとゆれを
孫くあり毛ゆあこうまをこ大ゆ此文ゆ条里竹ふ侍毛
こゆをこをこんをひゆ竹ふ文ゆとあそりて前の先
ゆふ大ゆ条里竹ひて面ゆ毛侍を侍毛此まへの
をのらふゆりまれうらふるふんをやりりらて海
こと孫ゆ此こを海へゆふ乃のひしなとく思ひゆく
孫とゆふ紀を侍こ竹ふこう姫毛んを上きこ面ひく
みを此こうを見をくゆ先こ面へを思ひゆふひ
かゆなゆをこをこりこゆ文ゆ事侍此ゆこを
ひゆ小ゆひうこり

ふこふんの乃をこへはいを　思を
むゆりをゆる孫こそてこんね

と云ゆ此ゆんゆる侍てふこ姫えを海をてをくり祖
とて大将ふをゆ竹ふ先なんやうせいゆんのを侍ふえ
といひーを大ゆ我宿ゆ三条殿八ふり竹ひてをこ
海と孫を竹ふゆ先ゆうゆりんゆ此こゆをゆるこ

乃をかさうくしふえそ思ふうこあとうしいとて

笛竹のふしくの数乃こゑをあつて

をゑ山あをのゑ孫ゑ世ゑへなん

空云と兄のひしうハうけふえをは来の世ゑうの御

大ねゑ法ゑ人ゑとありとてつゆゑ世ゑさへまふうて

しそうの御をはよこゑ姫えの大ゑ　ゑそれ

ゑをけゑふ御ふえ　ねちゑ　ゑきを

さてしゑをふうの御こゑゑ竹ふうをゑ乃一めく

ゑの佛事ゑもねやゑうをきをなくあけゑとふをひ

竹ふゑ乃糸院をさ後くゑ御めゑ川ゑ東ゑ人

なうゑ孫をあをゑをゑゑ世ゑ御めゑて皮若ゑ乃ゑ方ゑう

とんうをゑのひく金百ゑしくゑうにとをゑういされ

ゑれはゑ乃をゑうゑ孫ゑ人ねやゑうをゑめてありまふ

くうゑあなくはなさけ後ゑふひゑふこくまと云

事ゑをを人ゑををゑう孫ゑ思子なを付後ゑ山巻ゑ竹の子

と云ゑゑ三ゑしやく院ゑう竹乃ゑを女三ゑ院ゑく

御海ゑて後入乃ゑれゑとゑゑ方へ糸ゑら後ゑをゑう

ゑりうあうひのひしせ竹のゑゑ乃ゑをうゑらまうう

あうひ　をくゑ　は　ゑすゑゑと云

事をを八月十ゑ日の月ねゑ後くををゑうりうをを

なくありまをゑ乃ゑ糸ゑ乃ゑんうをゑをかうゑ竹ひく

入乃をゑれくへゑり月後見竹ふゑはまゑの世ん

をゑゑゑ遊ゑまをゑゑゑ乃中にすく出ゑ後をふ

やうにゑれをゑれゑん乃御寄

ゆかりなきこの秋をいうしてとも
ゆりをそなへすてむしれるう
をよろづゆへの事ふかくなきゆりすてかるき
みとくすむしふくをの

世三　夕きり

山をタきりと云すを大ゐ
乃小野をそなへ　ゆふさめしで
うくゆふ夜まめなるをとをえまめ人とを云ゐ
山里はをそなをゆふきりを

たちおんかくをなきらてちして
とををしゆへふ山ゑをタきりは大ゐと云世大ゐ
をのかをひちを投たち条の文まゆの名かをけ
竹ふ程ふを世冊こやを而一条は文をすてをうんと
ひをし人世間はあまわつらひしゆは文ををつまを
をのと云山さとかやうのようにをち竹ふ而へうつ
ろひをふ大ゐうををひくおつしうゐ世むまみて出
竹ふみちをうくゆうゐ野山乃をしまをくゐて
をを世おりしつけこまゆ世けんらとふらり勢をひく
皮姫六のたをしまをうくゆれを乃をのうへ入れり
てみをひをかつをか将乃ををとい一出房ふひ出
なふをは事乃をふををしんれぬを夕をりふうく
をこめてをうゐのをうを出は言ゐなをこをりをかは
ゆをは言ゐあゆ色あゆをまうくうへらんかをを野
ふちしてかをちひあををまをてを和いをくまを竹ふ

夕きり

あきふうをさ野山　風の紀乃をう

中比孫　　行ち業なと北山小聖に遣へ

あつ行さ海り外ひ〜に小聖人はあこ五は恩事をい
いとく過うくそうう〜名お部〜て寄たまりはい
うくとてみやは西くる〜きふちを志井てうふまふ
大和清らんはる西瑠小の法方やそう清統しつけく
うし法るを比あこをやうり竹ふ切　八きまふを和
い小聖人行ん法く量〜波毋のうやは西いのさまふ
うふくしあは名をはてるなりぬ為〜うをきうさ
まや思ひあきまていとくあちをくるくよそり
ててつ井にくれまふいやくはこふう〜量〜定北
法うあかふとて四十九日まく風まふ京へむ人
変わて三条北うんとけふ月はくかふひのひし也
比変よつるそこの前と云事を見を行ちそ乃定北
法うひ外ひ〜小結法とひ〜女房をあるふは金沢所
あもゆうをあまそかくまうあひくのちうにそあ北
ちうみうにううきぬ〜きてきちやうひまよ世く
大和乃とふらひまあり〜きうにふいめん世〜形う
比き北ふくらはと云事を小聖まとまを竹ひ〜し和
いるをちのふ事あれいわ〜のちい〜西ムうを野と云
かうさへちとも四てひうくつふふあうつ為はむうひ
ふまいまとのまふ也見いちのふゆへちくふはなく
へまよ〜うあう孫をあるこさまを月をのうくを野むまの
そうふとくいふ事行ちはち業乃たうれしく業あり
北ふうふちう後あるを人はの為〜

山巻このりて云るすい笠乃
うへはおの屋こと此時是を大事なて年月うしせられし
子新乃法花経を此くやうあいのめ〜おうゑあり
たきてのこゝろをこゝろとなくいと尊つと仏乃法を
のりの道を云也くまなりんとそ乃ちゝ夫乃とそむ
きをよ所乃そを世乃中〜てはなくこれりまさに
山世をを所さうり法ゝちゝりの行ゑ乃ていとく
あを祇まそ山すさう船しく忘れ乃ゆふ和せいと
所り也也ゝ也法ゝひゝそゝ女房ゝ又ゝ八乃人ゝを
あを祇をは仏乃行いとを打をあゝゝしく思人乃ゆ
うゑへ〜三宮と姫女三文をこそあさゆふ〜つき
竹へを兄をゝさらんゝとのすゝくを通すく三みゝ

法まの人ゝ丸ゆさをゝわてをこのなくゝるを尼ゝうん時をこと
ゑゝいゑをこゝ行ひゝ山梅ゆゝゝをかゝこにとゝ月を
兄ゝの人と中ゝさゝ也ゝの人ゝをあきなき法かゑを也いゝを
みゝめゑゝ竹ひゝ法神をまさゝうて立竹ふゝて
こゝを忘れ世まて〇無初ゝの文をゝ山ゝゝゑゝを
ひ〜ゑかくてむゝをゝたゝのをゝゑなくなゝ利ゝ毎人を
中文出竹ふ山中の文ゑをゝ法ゝの事とゝ中ゑゝき
竹ふ思乃上れやうゑ竹ふゆん世をゝ〜ゑきゝひく
中乃文ゑ所へめんし竹へをい毎をいとゝよゝ家
め皇ゝよゑ所ゝやとのゝゝひ思れ上の法ゑゝ
おく思ゝへる乃と祇ゝをの所ゑゝゝもむを
風ゝみゝこゝゝきれゝゝ法

さとのひとびとくて月ごろなりて八月まに
わたりに加へまうせるゐんのはんの内思ひやるに
そこはやとなりたまへるさまのさまハ三ゐのぶ
ぶたちをなさんとてをさなきほうしにかりまけ
かさのむすめまゐるまゐてい海をれ所をれて
ゐしくんあけ六種のん海ゐひ水をうつくとも見れ
まへくさくて相ばかりを学ぶ人を一人見なのく
かんを心はよくりてなし。ゐひて次ゐの君まゐほせ
ほをせてあとをれおこかをを勢をふむ聖分のあ
くよ風のまさまよりそきて見まゐはくかをを
ひのかくん世ふくをれかけかく思ふまてをなるを
しるをわれくを思ひしるを今ゐまてをと思ひく
なふんなくうちゐ竹ふよいやくをゐるをそふ
んちしてむゐふをはくうゐ我たまゐ井のちこへ
ちゐをゐをそふゐをてくひ母なゐ年わ七日く
のれ仏事をのこををくなくれかゐの色ちをむく
ふ我をゐ年をうタ六をよ大ゐ殿ゐわ仏使をゐる
いゐゐハのあきゐ人いまゐんちして
ゐををゐ祝ゐつゆそをきそふ
とゐわ世ゐれ大ゐのゐ海毋ゐふひのゐ人北ゐれ
ゐひゐをれゐをれゐをゐ殿ゐ車ゐわ
ゐ海西ゐゐハむゐ今ともゐもゐ要れ
大ゐこゐきれ興ゐひゐそゐゐけを
とのゐひゐハ海ゐけふゐみをれゐへをゐ外ゐれ

さく世の中のうき人みなとてもおとこかま
りなんをやうんせんてんと出るにひようたう
やうて美よ似うる仏師のくんう雲うく捨しあけ
き所そう秋乃すゑ法ようとよ中京まる御使を

かまくらの景色賀急ぎうしとやおもふ人れ

あさにうゑとくゑさうをきん

忘れよハ春のあけ初のみめてのひじゆんうくふこと
てをわ竹ふいとゆんありとそ覚えていのわを
いりくまて8年ぜ乃てわうまれうふしまふ海を
つけ乃ー法乃法花経のくやうい表ありはうく迷
を八月中旬海とくにあを迷をあを花ちうさとれ
法つうひのわ投をれちゑ里の法色うの

むをひをくちきうをあんしたうされ

乃こ里をくれまは法のりのをうり

といふ事をあり　あけくれ乃ゆを

そ紀物ろをすこかこ　秋のわの迷

なをぼくゑ乃ーしきれを中ーこあと熱なーい法をを

わう迷はき形の

法文　まう孫し　は巻まを法ーと文事

を源氏乃法思ひよあけ文ニ不ま世知りー海をう

我うう初のめてよこ乃きふ

大そうとかうふまは乃ーゆあ丸たよ

見こを思こ海れゆくを忘ちうせよ

空よこのひーゆんせうく迷たまひーみのやー乃

春の雪ふるまとはなふみもてゆかんとちあ竹ひし事
をかの御前にあくあそ祝なるに三文乃皮うさみ乃紅梅
みうく花はなゆゑ思もちうはかりうきわ花とか
うめ竹ふゆ雪一人うせ一をちうは梅かゝ乃裏に
有の発うきまてかをさくうさ紀見さまてちゆうう
あまをて咲梅をと山を見こわうりていふくあを祝乃
あさおらん菊山ゆきれんよをよひうけそあ河くん
ちりうん玉のふをあまをてんをとゆうまうて
わの屋とををれをそをやを人り屋
紅梅のうるのうつひきぬらん
空よ見てをありまなゆゆしあををゆい
かうをゆうかとあうゆ見れ見れ見れ梅梅
ゆをていとをれまあさはこうゆなるに大梅乃をを
春をくりのうりゆ竹ふりまを迷ふる時乃れ
うちあれゆゆ乃一寿あるる
なき人をちゆふ風よひのをうさあみ
ぬ迷てやきつるや南乃ゆうを
みかゆれまうりみをいふし人乃をあまをなを御乃
めーあをいををひしゆ乃中梅の春とゆう乃を思れ上
乃ゆ乃ゆをとみ梅梅ーたりし人ゑ源氏をよひく
御乃ーめ世れあさあれ時しるを思の上れ乃ふをう
てゆひしをあとれかをれ乃ちをまていをけなるを
志ゆうをうゆ乃をうさまをーを見をとてゆをを迷
をてれ人をるを見れ院ーをゆ乃賀茂

のまたりに月ひかり孫たちなどあつまりて
あそびるるかなどして成りぬるひを御らんしてはてさ
ものの名さへわれそれとのものまひくれ中将の君
はをこそとまへのなをいかなるをんなとめ
きふのかさねの名は人わをれか
とやしてあわひくしれをきてたまふ也を
あとかまふ和ものうしろ紅とうるみまふ
のとひうふをはらんして四きてんかやうとふ
めうしうるはるこをは人たりやく時そをを
うるみまふ七月七日まを御あうひ御りおるる
人の物ゝえをかりて給ひしちきりたりおく
七夕のあふをハ雲れよそりるく

わかまれ遠まはのそをきそふ
をうるみ竹ふかくて八月十四日まを一めりに上下
いめひゝてくらくれまんさう成りぬたりまら遠
たまくやう云まふ投中れのはふきる書うる
をきあふ風のうをきをきをなきりの成
きふをはいかのくてといふらん
とう賞うわ遠を見竹ふかれさそハおりゝおる
九月九日ゆをわるを句ふ者うきくをはらんしても
ひとりうとにかゝ秋うふとかなゝを竹ふ祢世
月ゆは大うれをうををはは御なくてわを御もあと
ふかのをうち句めめ竹ふさてしそまを海しを云
を遠のひくれ十一日のをてよれあうまを人云まを

せうしの新御所しめしおぼし御目たちけるも見えさせ給はと返
所にはかいとけ所りん事ちう御は仏にや仏前におほ
人二三人さぶらひ給ふをひくらんこせやたまて所によ
うれ志うのわうさまれたりつきかりし給ひし法文の
堂〻今はやうなるをこつ給と年よ筆の法堂千年は
かうこそまうく此世なかりつるまうさふをたまけな
所ひきんよと社を法うかには所しめてあひ久ぶかり
おはうは源を悔きうはしうさこいてのおもしんみちさ
とやおほ所しくん事をあはめてひまゆひて書付なり
う紀つめて見るをかたしなさし残草
おもしくも井乃まふりとも不達
空よそのひし法ん此うら思ひや家もせんうさ所
さむなはひと里孫いやくねらまさ海は法てうつ
めてけ所ふかも雪いうきふりてさむさをも里生
すさにはうこ三尖くきれあし法尖れ前なるいあし八
乃事たかしは法尖せ小も入たこや八わつりそめし
法をけしを此うかを出給をうましう法きてかしな
前のもさやせこと此ふ速て西かた里し控りし捨こ
御はれうくおく中小を田家かりしあわつ身かくうさ
本たち御はらひし身は人志こうかりたりしふ前に
思らしまふ仏し社をひまかへし所ひし御身うけ
いのならん世小のいを頂へおくとすき志は三志つれ
をさまれまう孫をむうしと今本くりせし所ふ念
志田はる海しくいかりおんは法御なそうさ仏前

あさかひ人こゝろ神を思ふ心ぬきなり所て拾月を
備名なる所ゑとをとりわすれ人なるまやとうしふ
所のつき竹ひく今日拾出なふ清かるちいうくひの
おやうに学こゝそうとうしれさうつ水乃清さに

雲まそれいの乃ちを志ゆ紀の中ゑ

いろはくむ発をなふるきしはく

と横ゝ面ひしい雲ゝ乃れのはかゆ有あめ西月を清
みゝちんふいうんゝちなをれりのまて乃ひきて
拾ゝ乃へれゝ乃ゆ乃ひくをりみ乃をまやゆしは志
りまをれゆ清ゝ乃ゆ拾ゝ乃ゆ紀ゆゝ事ゆ

古六　雲かゝく秋

雲ゝくまゝゝんせいゝゝ乃ゝ

はゝ八雲ゝくまゝゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ

乃家なとゝある所

廿七　かゝ所中ゆとゆゝふ兵記ゆ乃巻ゆ云

こゝまれゝゝゝ所とゆゝふゆ云事を三文と中て
兵ゆ上やなゝ事わゆひく梅ゝゝゆつわ竹ひ人
所わ所ゝゆ云乃ゝゝ源氏のはまゝの文をんゝく
志ゆひくひやう蛇ゝゆとゆはかゝらをくまてん
はかゝふゝ所くゝしゆまてそゆゝゝ所又かゝ所
中ゆとゆゝを安三文ゆわゝゝ人めゆをゝんし
乃清子面ゝくゆをゝゝを紀のゝん大納云の清子そ
ゝゝ志ゆゝんゝくゝゝて乃ゝゝゝりまゝゝをんゆん
ゆ源氏ゆ志ゆ云ゆ殘中和ゝをゝゝひゝゝゝ世ゆ志ゆを

ひまなくくれのへにも入待らん勢ありてくらしけなく
たひたりのひとり々の頃うつりかはりてにはの
かほかなしれるりさしりの頭中将と申ひやう女
きみのみやうち座にてはさと君のまうちのむ見を
かさして清書にふれ夜をあかしちられを被乃うち
なしてかつらしの秋をか達り散てその御拂并残
わをゆくこうちくまてにすほひをあり見いあ人を
白ひかうはしをおりしまへ程よ人々のあちふひやう
女御の定申しあの清くこそ源氏乃後ハたちのく
人氏んみをうるやまよ達程ひしされ紅の後はなん世
のせなひしを二夜佛世よおなふと思ひしこしくく
さまは人をかくられ有り白ふ事程なと付爲し

并　竹河　此巻竹河と云事は
玉けかそれむきうち出しひとつよ
　ふりむ事ほ程乃かみと云く〳〵きや
竹云者は此ゆへ人の事をひけくる程乃大ねを後すあるたとく
まく人をんなくのち程ひしそのしう勢くのちひめ君
二所のうち此そらにまししく々御けりりりいけ
くしをおはしありの尚侍大君うかいまさ四位乃侍従
とそおもへせし此うちの御孫とみのけく光君とうちかう
あるは此ゆへ人ろおりして姫君のおもく此云続のひし
とそあさおかりし時こゆりくてなとうしひてありひ
忘をよかつる姫君のおうち夕きを雲井の宮乃
こらしにまふあけ〳〵子蔵人のかねとこひしを

きこえさせけるを　ハ々譲とて此君より庭の花をとりけ
梅をそごとうちかざし　させ給ひしいとくんなれ
しかれば竹河に此心を見　小孫君まふけたまふ
春の夕暮　　ごのかちまけ　花のけりの
かひ有ける　　守と付為し後遂とも此人々邸
もいさ侍る事まくる孫君を遣はせん院ハ系図竹ふ
てあるをもてなまふいかうとの表ハ内ハ系図て母れ
内侍のかミれゆつりにえて内侍乃かみになり給ふ
あらひ　　紅梅ハ此まれを云事その此むめ
かの故大納言と申しきうゑりんのかミれたとくそ
かし世れおほえいまし何事をも人よりそ
かしこく花やかなるを紀人ゆ紅梅れおとく

定申し此方を見るまへ後乃大納言のむすめ乃此次
とかいれをひかきし人を母そうしまれさらてかま
かさなせしひめぎミを世おほえ兵部卿乃此れかミに
あるしの後こやかれ　なひそ後此殿ハおりしてう
みや乃かミにひめ君一所おはしなり此たかきれ
庭よりとにまく生てたるしろき紅梅ありを見とあり
なハ乃たかきと申し也此ゆへ故りし故大納言この
梅乃えるのおもし流ゝ成おもて此子れ若宮いまさ
わかハ天上乃おり成るを使すてまかふ兵部卿乃
御かさハ人まふ井のゝたやうに流ゝ見えるよ
歌　ことは　春ゝたる室乃くむ児に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中務

南葵文庫

宇治十帖

一 はつはあ　うそそくともいふ

二 忘れ草　かやの原とも云

三 みをつくし　さむしろ　澪のうきぶね

四 さわらび　のわけしたいふ

五 もりの木

六 あべまや

七 うさみ草

八 けぶり

九 あべひ

十 [illegible]

一　はひめ　うたそくはきれとも云

あかの原大ねの尊の世さた

はひめ　あれたる海の世さた

ちかの乃志川くふ祝そぬ迷々原

光孝宇治のちひめ　ひめれたんせいはうたそくと云

寺うちに　ゐる文をかふ式　ゐやをつかの乃はし

門の八乃みや源民ゐを使れとそう迷い世ん院

はくう井乃ゐ乃志西しやくぬんのはたうはき

ゐさ記ふこさ海ゐ和ゐ　ゐ人ゐ式八乃文はは式ゐ

井ゐたくまいゐ世ゐたやなとれゐ文ゐそゐ々ゐはは

ゐ海かまへゐれ者ん源民なゐ世ゐんゐうゐは男ひ

をわて世ゐ行はけさまてゐりゐゐゐ八ゐゐ

住家のわてを屋をもふしは八条院に住家さへ屋はあ
りちきいとあさまーを物乃活を屋ぬるをは
れかしして宮殿り山さとるち竹へ弓所にうつを
まを世のふ殿殿ふをそうちれ交とゆ屋てはく
なを屋をして西遠たのの内子は小聖は山ちの陣
あとををうひ竹へへまいとうはくふ姫をこと
二人のちかい竹へふを見をてくくありてく
なくくはこをしをふうこの君をかくをとをんの
の人をかかれを相なをあくひのふをりくを思ひ
かをひのひしかをは姫をこちを思ふこ殿をく
をーをめれ高をををしーのをは山ひめ君こちは母君
大だんのむをめのそれたせーうはいのうをの老を
うを竹ひを屋をてををなく成のひをまくをひをの
をてをくなくくはをひ竹ふひをりはこをやをゆ
事人云世なくうの屋こは山をまりの月をを孫
ををいひをを殿はめの屋をーを未年れをーろをを
をを事あのりド殿大ねをの比こい者は中ねまく
ありーをはいはきをいをふーをを郎をゆくを
思ふ程ふ秋ふをふはをまーく山雲いをと思ひ
屋ねくは君へ思ひ立のふみちをくく山ふくく屋
まく風乃音ひやくうふ相ねは明ーをのふをなくうを
ゆいくくめ連をくうをを

山は海ーみ毎人思ふれはのはゆくるをを
あやなくり海ふのをくをくれ

空くちをはこてるすくく入竹ふかてたちの色成まく
五月雨はをとの夜うふ空ゆるわさと乃はあうひよを
あうは日うしむてうしたうあてひをさこ学うう
くうの乃をと空ゆみ春うのあといををたうくおも
ちなくてかそなこれを空松風おあひ学うう
ちしてむまひをとう　うりてきて竹へて夜い空治山乃
おくあない　ひをとて　ううきひ一星西きふ念佛
はとあにこれ　う八の乃乃竹　一おあ乃一　後をて
いとくすうあ空　とは原后人　ま原を原をはて世て
乃そきあ人をいとあそ遠にをこけるて　みをたうく
まれあけくはすらかく撰ふ乃うく遠てたちをまさ
くりまて雲うく遠うう月をさ一のそ紀くあふき

あうてあ月をま孫く原乃星乃乃との竹人をい原一
人を原三原は上ふかうさふ我うう星て入日をま孫く
空こそいへとさ海こくふもとをおわうひなをたうさ
孫学ふをもいへ　うう乃けさかくいいうを方に
へうう思ふ　を。乃ふ紀あ　きなうてを乃思ふ
けは海こ　ふもりひ　こてあう月久乃乃乃空治と
ふうを。　山うさふ遠ふ原ぬ　川なこ学うの色
乃乃新け　さか乃ふ川くふとくを原一さて
をうふうん乃ふれめのとこ成しう世れと後へこ後
西北國のををやう乃めこあふあ色たを一う後よのかを
ては姫学こちのはう後兄ふうひあ五たち乃毋
うこにをこうを学ふさを一ありこてこのをうくは

為んの君こさい者う乃中ゆるよ志ゆひこいめんして
ひ〜ゆ事たをこうりきこうゆにいとゆこ連よゆ〜きこよ
思ひくゆ為んの君をを乃ちまそこ〜ゆ御大ゆるゆこと
こそのふ後右京門のこと今こゆ時よいこふしてゆ
女三宮へを連とて〜ゆ資ゆこ志ゆひ〜事をとて為んの
君とり出〜てこゆに又をくるこゆ姫きんこうゆそ
思い者こ〜〜ゆ此中　こ為ゆきこにかこひしゆこゆ
をこゆ又六あ〜ゆ　ひふそこゆ紀こ人ゆ女ゆを為ゆ
乃世ゆのをゆ為へき〜思ふこふよゆ〜こまこゆこれ
さとて来こゆこゆこゆて見ゆ人をゆ大納云ゆ多ゆゆ
為ゆ辺のやうゆて後君の生ゆふゆ〜さこ為く
空こゆふこりゆてゆゆあとをゆ年のゆこをゆとこさ
志御をゆしくふゆて連こゆゆて為こ世ゆやう
乃事とも宇治こゆやしゆ君ゆ初をいふこ
こゆてゆゆゆのこゆ後こりつけ為〜

二　志井ゆと

こゆ為こゆ御こ事　こ

たちこゆんこゆ　為ゆこ志井こゆと
ひゆ〜ふこ〜ゆにゆこ為こ〜ゆ為こゆ
とよめふゆん世ゆこうをくこくこれゆりんゆとこくく
ゆこてこゆゆゆれきゆの宇治へゆこりゆ竹ふよみゆゆゆ
こ為をゆゆあをれなる仏ちして連ゆ乃ゆゆさゆ会ゆゆ
山ゆ入ゆりんとよゆゆひゆ為こゆ為ゆゆゆ為ゆゆゆ
ゆふこりゆゆゆ御ゆ為ゆ為ゆ似ゆ世ゆゆの者ゆゆ為ゆ為ゆ山を

いろつきて女房たちなどかうめさ
ぬりあまりに文を結ぶ梅の枝
事まてをひめ君ちかの事を中宮のふみ
そのくちをえさせめんをなくてこゝろむなしきを
殺ひ事あるにかの殿
らたかいかりこゝとしたる事をあるあく
うちかへし　しのぶ　いかしあまうをたらん
して志賀のうめはひをよめるこゝろ志賀のあとうち
あつけ給へ文うあ　秋こ　うちかの先
中屋と里　こゝろ勝まふこ　と云事を
此巻二月廿日なる殿へ
くの京大将うとそくひめきこれあとをかくな

さる海あ中竹ひ一行ようたる世へ　寄里竹ふ物かをハ
宇治の中中ちかゆうう　たせ　此姫きこうち
乃うこへを行せうそこ　ものうんと　ちこ　袖人目をけ
を京ちかはむうへ　人こ　寄里一ちをつ弁ちれ
こて海ち竹ふ口や　里をすてうれうちかまこ所を
先こ里はいゝ中中　こを見たちこの世乃きこを
あまのこなの西建ふいそ　めてな利
三　あけまれ　ひまきあけまれといふかを
こか殿乃ふ引ふめ形うをそくれ一めちのは備事
ひめ君のいやなこ竹ふようか殿をこに見ん孫ん
とそわこ里竹ひくよ乃一めこ
あけまきこ引前のあちきり殺むをひつ

おなしころ源氏よまるをおもひなん
空にふゆく人世也事ふかく孫ゝ
ぬ残りに人にの源氏渡乃玉のとり
あのきちきるをとりゝそむをちん
とおもへてつみみん佐よくてうきし人るまいのう
との岩も源氏けあしゝら花しくにあね君とふうく
むかしはゝゝけ詞　只今時すあし山るをやうに
はかしりそ杉ゝゝ方よ至ん庄にをおりし寺ろふ
中宮と一所よ孫ぬ人ゝ昂られとゝ八りけ乃志け道を
なへうる安一りきゝ孫きく空き孫て孫孫君八ち人を
かくれまふとくまを竹ゝ中宮といふよりな連とも
お孫君りはうさ姫いゆくめうりふうゝめしくて
なふとおくかうゝ乃御きてり人をて我り清ゝさ添
おすく丹おふ家に中立あそ世まふ後よ二条院乃
西八ふひよむゝりのひゝ若ななと治うけ孫ひしゝ
こゝやをあひそあくいと色なる法も源よてたそく
宇治八加よりわて　ひとれなゝてむさ記御門なと
きうを給ひし　られミ　盛んすゝ源よ思ひなふこや
られはろく　ふかよゝ残いさ光竹ふく仏丹法く
人おそむくひやりて御らん世そなと御法世名れ法
人に丹まりせぬ秋の道をし竹ふ女八方を知けきゝ毎
そぬよあ孫よを治八思ひし事よといひ志ゝ仏も源
くるしき見と乃ミおけ孫はりしくらし竹ふ法人ち
もなふとおくなやましをおりしま世を此法ゐてふ

なく成なんと乃を悔うく思ひ立のふかくてよりふ
文をぞ仏にあくかきくいりふーてくを思ひのへた
をかけきみちあれををくくと思ひうちたまりて秋
ふうき比ををみちたらんきんとそおりひ立竹ふ
うちへたをせんとの仏世みををうきまてまハうく
とくの人くあこたくうあうひ竹ふこやをたあうひ
身ふうこいうこいうこ竹ハ中やををとの乃のあ屋ーせ
竹ふ梅をあのきこふひ乃ほるくありなんとあるひ
まふをうへうかれの方ふちりんきの人とつけ竹へい
人ふ遠ん木ーふうい遠れうち紫みとくら殺こく
ほ尼ほうけう殺なを志たまふにうちふわ大ゑれ
ほうひとそうんこを大ゆふを喜わてかふくしふ

あるをき人をくふまて世けたあーゆもあをぬ屋ーと
あ遠を事をほうりくそうふなうひあーをうり
竹ふまちかさこうそこををうふ屋ーせあて皮
文と紙かうんいさこほうわなんちうあ程よりくうり
志りうをとそむな くくうへをまふほうさはいそん
かさ野ごゝおとこふ女とをかくうそをけ兎我を
世よほうまーよいっぎうよりうふ屋ーをふうくあ孫
兎ゆ部ーあーまるていとくほ仏ちをよをくを成
ゆく程よ大ねありーをうふ世中れ兎をわりう弟と
あるひと思竹へと色こいひをさて所年世六うく
くれをふ大ねをうさをなく思ひあけを竹ひくをて
ふほいをにあをりて程ハ海り程りほ海ほけ乃事

ふゆゝとて方さうわ所とふらひ立ハ冬なまを
いとゝ山里さびしくゝ雪よ徳つけ見ひく
かゝさゝく神社氷ゝけさまゝおもうけしくにあけき
くゝ人まふかやうに事を付角ゝあけまれの君仏
法よう重し人ゝ心うらなをにより世を法く角ゝ寿
のゝく海ちのふかゝてしてかへゝなをれ仏を角ゝ
あまをまゝこゝに山乃紅葉ハなとくよ世くつけ角ゝ

四　さわらび　法ほうひと天事ハうをそく
の京社教初めゝて今のおもおゝてたまゝひゝ
里防法中社教乃山系ゝをく来て堂ゝひとゝ初の
めおゝて海ゝく西ハ春の初ゝてらひ使くくれ
ゝあなをらふ入くくをそまうるひゝ里社京

教ゝとてあまのさ社春祝法くゝく八
つをわれ思をうわうひ初郭
帰思ゝ年ふ

あのを海をなさこあの見せんなき人社
かゝを丹仏ふこまれ月見ゝむ
空ゝ　ゝゝゝゝゝゝゝ人をわうひを宇治ゝ付へゝ梅
仏中乃君をゝるの紅ゝを見ゝを春や世ゝとた
とへわゝ月ひとゝとうゝ見竹ふいそ乃ちゝ月
京社堂ハ春ふわをまそやあけ京初ゝ竹ふさて
仏まれの二月にゝ月ふ兵部ハ乃こゝやへゝ人ら春
いをめてゝをゝとれ京　ひとわゝくまる
ゝる里を海ゝ　海をらひ　峯乃ゝをれ世ゝ

をたゞ世にたゝる都へ御ぶんをつくり給へ

ゑ　やう系　しまき原とゆきといふ事い

うかふ大内宮治乃山原おくらやまく京より

やとりきとおもひたちやこれりとの

豊ひ孫をいうふさひ〳〵うまし

といふ京原せしんをうらの松かひ若う殺なひて後

年月山まにとうかふ原六はゆあけきわをまぬたる中京

をうかふ宮乃小れいうさみあをて京よおりませを

うち乃文をいやくすまをてくれを被みやりを皮

文の小れ方よおほせ法へせて寺になりてちんてん

をたてくときくわうりてむう乃事語きうせ

原んのきをひめ君みるまをつてあまにあをし

殘ちくれ屋とをふなりあきてあり〳〵てはらんし

めくう〳〵うう原くく思ひあくを日をんまぬまをとう

寿をかひく遠をひし〳〵ふ也梅山をにまかふをを夕

をうをの乃はむをめをの系よ部〳〵ちあを世やをを部を

ときめうきせをの　ふを世を殺中乃志をうさをなく思し

めておきまふなく并部をくいれ〳〵祖をおもをせん

事をうかしくれをまれかよあけき竹ふ者くあうす

原人うを竹へを八月うわうをタをうわ乃はは姫の方へ

おり〳〵原さを中乃系西はしをかくを思ひ〳〵空

をを山ちをけおは部れの小ふさ人原わあをくや

をおは部原をてををあまをつわた系うをうをなるは

原くうをを殺をうををしあり〳〵殺出〳〵あへをを原の用を

やうくもとの所ひやくゝなる風のをとまれに
孫のをむ〜あるまゝかまへ山里にもとうよりを
畑うくてうくよとたまふ

山さとの松にけふをうくもるを
秋ものむ秋のうの梅をなうるをぶ

とよのたゝせをしし山里をるを秋のすゝうさのう
うめ　ふるいしの山ふよををるをさ所のとに京のか
やうにタきのゝ〜へかより髪のひゝみかの秋
中立に事のれい皮をゝ法ふれやうふ世のゝてつまに
はきゝふかよゝ勢まふらるれ世れうめゝき物語
なとしてふううまておりゝていりくをゝんはゝと
をみけまとまくひよをゝ山里のうをを者のうき

と文とうを見物ふううの山屋にかさ
なまゝ文のとうふおりゝてのき秋にあるまを
畑しくふはをゝ法ふはゆをるかれのうさ事ふ
所ゝあくさちまゝをはらんして文なゝうゝき行
乃法ふ武しをよゝ　ふのひくゝをまとあうして
所ふゝ〜ゝうのをゝ乃をひををけて京うり
ものよゝて思りのやかゝうゝき志乃をゝを
まゝをゝりとうはゆをけくゝく
をあるを女芸の屋しふ
秋をうふ聖屋に業ゝきゝふをのすゝき
ものめくゝ業ふつけくあそ志ま
とはをゝ形の女君者の乃こをすゝめてひうを世者わ

まふかやうのものをとうるなりてををあおかち字治
みやこよりもをこしたをてよ都にもを修へ京時乃事へ
とんはをーさそうかれ大はちあつ為よまーはうの
中文学なりしおりーをれちーのたひのまま
ゆくゝ御なとくのまひをふうをみは巻よあきうか
と云事あわ是をはこうやタきうのたとくのくさふ
おりー　以此あさかーあまをうか
れたりしとそあさ　ちの花をたわてあふ知のうへ
ふ知きてを知くゝ此ひゝにあうを知を見竹ひく
横のふ方乃おう孫君ゝを者うんよ志竹ふ
と見をるせゆくゝ孫くを孫くあくんうー寺ふ
よそへくく拾見乃めうを法くゝつゆれ

ちきりうけれをーあさうちの花
をようーあるうか御といふよ流くかあふをなをハ
たしまををかやうにをれくかふいひわうり竹ふ
御取りをわつかりーくかかーていうくしてあ
のかをまと思ひめくしてをわを比乃ひさちのを
とひををつやうれ女をうを山中の去乃山毋れめい
あつを中ねのえとそうやはうひをーうれかうを
なひくのちにうをくの文御くふらんしをふまや
角くあをあをしうハ文うふをあをくやーを和御
てをしし事れやうあを知なうれ知めーをてをれ
ううめーをををーくなやしてををやうれめうー
あをしうひをををーふひあ去をうをまわ

て母人ちまたあるひとりをぜんこのうちに
ゆゑとゆゑくなりあるいはゆゑとゆゑをしらずゆゑ
なりとしてそこちりうかもゆゑのふりかしてう文言の
はうくへちらゝ勝をらんと思ひくしゆゑ中乃あるさなく
おりしうふゆいひうわてうくとゆゑ事をおほせ
おくゆゑきはのうてに光見をうたやと大ねるうく
望のへを大将をこそ思ひくふうの事ゆ

ゆゑ人のうさちゆゑあゝを分よ拾人を

遠しゝ義をさのなそのゆゑせん

と互わう拾者くたゝさふほとゆゑ付ゑしてゆゑ門乃
姫君女二宮とうかゆゑ殿よ然りわいのりうの乃めんかく
ゆのあゝんされともゆゑ紀人ゆ事わされうくをあるひ
うちへおりしゝ屋をひめ宮のうふへ宮をゆゑ
拾ゑんゆあまとちゆゑへまゝたうわあれい物語ちのふを
大ねあまゝ君よふをあくたてのそふゆゑのへをひめ若
いうさを大方君よ似をまへんゆゑけくつ丹ゆあふせ
ゆへ人の事そしあゆまゑ屋ゆきゆゑあるひ乃
をくことゆゑ光を宇治の中屋と宮をうせまふくうをみ
なと思付ゑしてゆゑ宇治十帖の中にきくれうけ物ゆ
事ゆをよりかゆ拾をおかゆ屋けのひちふとうそあ拾
をんゆ世ゆそしををを和かして女二の宮ゆ拾方乃
きくゆの光ゆたをしうろきゆをへゆ劔上よたまう
あふとゆうゆあまをくまうしかきしうとゆうち
ふをゆりかゆ拾中納云ゆうをゆゆ紀めしおさまうゆ

きくをうけあれかごぜうくせまふ門のはかるまけ
さはなのひさ一えるゆるはとの竹ひしを中みちん
ちくはして菊をおりてそふしまふ
まつまれうくふ孫ふさけ風花なるは
ちくはのまくふおりて見まし城
空中はまし月八四乃はれうさうわはをう
ちをみはのんはうまをふしそのくきくふれ
乃をまのいろをあせそはりをふ
とあはをせらまく花こふとりは竹ふかくてちよひく
ふ条を竹ふかちつかくく落れちんを乃てそれ
大はの乃はは方へ京うつはえ勢なふ大はなる事は巻
まりせかちつかれちの乃ちんは年せをれのふんま

はをりんれうこのあへふんを大寿うふ巻竹ふ
六　ありま屋　はまれはつまやをいふ事
をあかれ大ちやうはは所ふあ
ゆとむるむくやちけふありまやま
うてもかくふあまはくふ郷
と云ふゆん也をうやのかれ方のうかはふくり
はひ姫をた近かはと云人をはくふつ
ふきむことやらんあかてひまくてむうふる
毋ちはをあかてえのゆのかされ面へつはく
はくあつけきときこゆかのれはゆのひまに白ふ
京ふのそはくとうくえるてはひ狂ふあれと
あきまくふ思ひてたくはつけ名はおはきて三条

あるかりあとあらくしき小家をうち造り所に
ゐーをさ思さて大なるうちへおりてはなんれあま
をさ記ふやわ竹ひくわまを三条乃きひ所へおりて
たりとのの人あま参るくてそなとくりたりと
うありわを時乃ふこかくてそれあのつ条我は車ふ
乃せて内へおりーてをそ竹ふたひ乃宿ふとくあを

むくら　あま参るくふ　とのの人

あつまを屋なを付ゆーあをそうーふりたまーかりは
九月ありゆて大条うちそしくうち八かようひたまふ
ちよふくあをさむこうふあんーー

七　うさみを　ひ　うさみを

うさみを此をこれうきみをといふ事を
りー

さちをかれあーー後ををかりくーー後
これうさみを参ゆくをちくまあ
をこ云ふゆへせりのありまやの君をいさるひくうち
ふやりをさるひ時こかりふひし程よ兵部に小れふは
ゆ乃ひまふりのうふ見竹ひ人をいるる人をんん
とわれくを思ひを秋のりの夕に小の方ふとひ事わ
ゆ人を云まくくーてをきゆ条竹ふりたふの年
乃西月条のかくへおりーてを君の年まをそいり月
くーこおりーまたを清院しかをけをれりたうち
ふりとそうゆう　ひ前こあーー松よつけ学くを学わ
我人くは御なを前を条うれてを条重ーーり交をいを々をまを
乃みくをくうくハーくやりてはらんをきハりくふ

まあるこあやしくなりにけるかたちへつゝ
みかゝるひのへいのなかの人ふかくもあらぬけしき侍家
人よくりきうゝ竹へをちうくとゆ侍こゝ侍
ゆゝしひとみちのうふ足竹ひしうゝ秋のタまゝ
あをしるる事侍をてをちひしくおのふまつかそき
あるかゝのこゝ紀足竹ふこゝよ我ゝ乃かさゝもゝ海さるて
笑こたり人をゝ門まるて後うかゝ海大ねれりこゝる海
孫をこゝみちうくいうゝ名ちうゝ紀事ををく人
ふをこゝまふとさくやうゝ侍こゝいやをよく
まるひのひぬ連ををあるこゝ者ちうゝ思ひ侍をよく
名くゝ海ををと云女房のおく侍ゝいまゝ竹ふうてき
ちうゝ内へ入てゝ名くゝ大将乃おりこゝうと思ひく

ゝちうけぬ連をゝ侍ゝ思人也侍さまゝくそあ紀のへ
たうひそなきうゝちうひをかゝふゝ思ひまうぬちうり
とをゝ連せあうつきうゝ人らんと思ひ竹へをさゝに
はかまうゝをゝ海しくに志こぬへゝんちあ侍ゝ者我
をてそゝ紀ゝをとくまゝ竹ふ侍ゝこゝ大近ハをりて
あゝさ連ゝさまゝく侍ゝ人とゝも和ををゝくゝ空あけぬ
まハうかゝひゝさ海くゝ侍こゝ事をとうゝへくく
うゝんを人やゝゝ海ゝこゝんゝ門ゝふこまゝのひて
あゝさゝゝ思ゝしくゝ乃素をつきを侍ゝ乃海ゝ人ゝを
いゝくとこゝゝ連竹へこゝ安を思ふとゝも色をこゝよゝや
空ゝ和ゝてこゝ侍こゝゝ名加ゝ名侍こゝうゝなひゝ
なをゝゝまゝ海をあゝ侍ゝこゝこゝこゝくかゝ

なごりをのこりきぬしくひ屋くうふ殿北者といと
あるまじく霧のこりきあるつつ夫よりおきけりまてはる
うく海りのふそのたりうやに舞み
世ふ志まに海ふへまう那されよ豊ろ
あこをみら殺うるくうーはく
海色てのうさあは
なこををりとなく紙てせ紀うまく
いうふりのまをとくむへきあそ
といひかりて竹ふりひるろ思あなとみ付屋一人
たうへなをを屋一かくくても牧返ーさせんうこ
なくていうく屋へふ屋やなきまくみやりのいみみ
かをつけこ志ふひおのふらくの人めをりをうみて

ハこる屋行らなるみ海宿をとり竹ひくふ舟よのりて
りーわさにてりを海のなるこーにら紀をふまこうろ
ふらしてこらはかれこし海とや舟こうくめて
見こる海へを大なるいてれこ海ーて海まこ海をきを
本れうけをこ志けをかまを見竹へをらとせをふへまを
みこ屋のみうこををのこまひくこうや京り
やー海こまくハらうん海のうこらをれの
宮乃なひし海屋事をそーまへてりうこみまと
後ーをりてこをうこみまれきこをやーけまこて
茶をやーうけれるし竹ひくは屋とをみては海いみ
三日たこまりこる海ひしこうをら後ら門うふおりて

あやしく紀正くなりあくはてなとうるをけこ女男
り海とともにうちうひ学ぶ城う業てつもりかくて
あうえやとはなることうけての外ひへ海おもうけ
さこそわを捨うこをありあ発これ家り所海れ
ひやうぬを立学ぶうそれあと業　すくを　絵
川よりはち　やや　所海ひやう姫
赤連を宇治川　よりわちなとの赤海によ世角
たとくくしく前のふ目り海とも月あの発出の人
をゆ貴いこくはをわてうれ我をむうこ城見原り
外へをうはこれ角へくに本すをりそ見こを原
山をうく見をうけ学ぶやうふさくくとして夕月
うくやれるりふくるはけあへみちの見なきを

あを連をうへ見外ふれりれ寄り
　　峯れゆ系みふを氏こりりあことけく
　　をこそ海ふへみちをまとりは
といふ高倭事あもれをうきたへに云うも世
赤連も宇治河よりれちれ車あ兵学り見紀く倭
角へあつい春世妻のゆきなとうを後うが原大
乃れをはるりそうをそ海をうくくそうち
ちつまをて后の人ふを大将を海と我なふをさくを
やうあそんくをを与よなくをそつけきわふうを
ふまさこてあを我をふうくあ和へつ丹ちち
赤海の夕津く日ふり海とをはちくうちみて
角のめいさへ外へをれとこををこかれ事

と思ひいでしてかくてみ袖をあまりて山乃うちい
かをとゞめてくさむすきふそ袋を形こ
きいでれうーう乃こゝろをたゝ永ちてうーうふ
ゆらうふなとゝのうふしてめあまを思うゝ乃こゝろ
あめうゝ雨なまを乃ゝ袋ふく日あとにそれうこ
の事乃こゝろいを乃ふちしてゝよ明ふなくさこ
ゝ世のこかこと世こあをまうく遠しー切明ーと
ゆゝ毎く孫ともつゝみあひ見ぬゝとゝ乃こゝろ紙
こ袋ふきゝとにうちうこさらひこうこみ
うちこのふゝ紀ちきりをこゝ人をーを
はやふむこゝ手ちゝ後ゆゝ八をふ
と續しーあをこゝ乃こゝは永なと字治ゝ

付毎ーかくて二三日を紀こゝ久ゝ竹ふよ和もうけを
いとおこうゝ毎ーく笑こゝ久ゝわうこゝて交をそれふをして
はゝ後もあこうまこゝきゝいなゝれおゝーこゝわ後ふこ
のかふひをとゝろ世こを切とゝを大ゝ乃はゝうひと
みゝ乃はゝ使とたひしく紀ゝあひーゝいそれふゝわあと
はゝいまこゝ大ゝの方ゝ毎ゝ後ふとゝう見こゝ紀ふよ

後こいまふゝとゝもこゝてをゝ乃まつ

まゝらんと乃こゝあゝひゝふゝれ

と字治八乃はゝーたゝあゝとゝあゝいまを思思ひあけき
乃こゝ毎いをこゝ加明ーふ紀はゝ使はゝこゝ手ーふ乃こ紙
こゝふつけこゝあゝふをまうーーを毎ふゝ乃ふよ
はくゝ毎ーこゝてうきゝひ思ひみこきていゝくせんと

弟城うゝみくふりみやをあつてあんないし
ぬんへたとのの人きひくそうちへをいまをうけと
くいひそ侍ひうんりあひうわいて
へ業やうをなを熊谷とそ右近と同仏なる女をう
をとうやりたりしに而八そまつるはとも此人むまに
のをんとをもともえのゝ孫八わうくつをそのをて
きあはすそをやわてたちうひまいふようやをはる
まくと城をうち竹へ弟八つまくまん風りの
乃おりんとりをふり而をひんを熊谷此なりり
城しおてをを法ひくゝはをけをや角かつ乃家ねは
のをたちをみた法亜くあをくく畑の竹ふよをと
ひをふいぬ乃うをくをみたをなふをんかそく竹そ

ろをを見をひ巻れ面白おしを重合とやつてうんうち
山かつ乃家　の乃の志ろを　をとひをうい思
あ乃かしく　ふとくゝ云るすうをうさあ宇治よ
ある角ゝ仕て文ひあゝをううんを竹ふ結法これなわ
さ海ををゝうりゆゝ久熊谷和あををまくくをうくいろ
あ里うくゝて大をう人はかまをうあ乃をとをなまを
しそをうやをおりゝまを世とそいそをきひうへをらんと
ほく法ひまふをうやはをれふ熊谷和さ紙ふむうへをうて
んり乃まくふあ和ゝて法めれとの源九条あをうり
を而へうつ法りんかとくへ人志まをかまへ竹へを女
やいうくありを法へをを弟乃りうをこかを海をるを
とふかくふ我弟城なを西よおさんと思ひを家あと

をり世門のおとゝひとやゆを我身はをき所とぼて
捨ててうにきぬみそのゆりわきて人の孫うるまふ
つまと成ぬ　あけくれおいらゐ人へ行へき方をもうた
ゝかみ神をおがみ仏をおがみてくらす夜とくもりあれのう
ちんまわりをあつまりてたみまくを祈まて
我をつきくゆけ　空あけきを所を交とゆかり　き
おとゝなる　をかさなる所うゐたくまてをいゝ勝
たまへとてうなつきそゆ貴をうを光そ本ゝ海なる所
あとゝあてゆひやうとう院のうゝ法よ大きなる本に
ふにをてたまを小野はおまをつ世をうけかうに
ゆひやうとうゆんま宿つたる所うを見つけくとりて小
野よ海ふやうくゝみかちしてなる法をいををまて

人となりて後こそあまにあるをしゝを身宮治よ本
亦と云事を為一本亦ゝゝ来を三月来あり
八　うけ法よ　ゆきれうけろふと云ふを
ゆうさみゆれあとなくうゝ勢をのちゝ不孫外ひ
哥あるうけ法よのとひゝゝ成見を
あるとをみくまを為とゝ思れをな
ゆくゝを為ゝすきゝしうけろふ
空の星ゆん形ゆさそうき永ゝをふのをさ為
あとをゝのなくゝあをしゝうゝ冊ゝあけ出をゝ所
為一人目を法ゝまくゝそのこし玉をゝ法ふを海
てう空なをゝやゝあゝ為為聖よをゝりゆ貴てあれ
きふをと所ゝを利うけ法ふと云事あゝ八徳ゝき

水はあそときしし乃ぞうふ屋やゝふ屋ゆゝん
なとやうにうわて付屋しゝ云をひさゝゝ山ぢあけふ
よゝゝ志川ま世ゝふ伊ぢ屋といひ――女ぞうありゝ
志きて物語ぞうゝ毎ひ――たりの女ぞうゝ屋あまと
後ゝあそこやゝ乃けゝぞへよひたまひさは毋中文の伝
方にさゝりゝむゝぞゝよ物ゝかゝぞゝふ海ゝうん――ゝゝり
九　まゝゝひ　ばまれまなゝひとゝ云事を
うさゝゝ此表小屋乃あまにつ様ぞゝり小野ふ屋を
ゝゝふゝりゝゝ世ゝりゝ云ゝゝふらしてすゝ屋ゝり
むゝひて思ふ事を云ふ続しゝ屋なまふわゝ者れ
事をを古にををいふへまなまい屋ゝ使くゝ空
まゝゝひをしてゝゝ屋我ともゝゝ思ふ事を云ふ

よゝゝ也ぞうてゝこのまさゝゝふゝひ乃表と云ゝ屋
小野ふあまと屋ゝ初ぞふ八ゝゝゝ世毋なとひまつま
てゝゝゝ世八　ゝ屋ゝけゝぞうに宇治よ屋と屋ゝれあま
乃あよ山ゝゝ屋ゝゝさひゝゝりあふをぞまゝゝ
ゝふゝゝとひやうとう院乃ゝ後の末平ふ海やゝ
ふりの河ゝなゝゝ乃ゝゝ志ふゆゝさて見まはいをいふ
ゝゝきゝふ女房ふ志後ふあやれゝ後屋者をなへゝ
なゝねふあゝきゝぞう海きゝ後をあまをゝ勢ゝゝ後
を見ゝりとてこれひゝ屋にかゝゝ世なとしていと
ゆゝ見ゝふゝゝとひあまのむをめゝをなくゝゝた
屋ゝうひひこ苛をゝれ屋常に小屋人かゝひゝふゝ
あの表後見まわてむゝのゆゝ屋ふゝわゝゝゝふを

なげ[illegible]きすみ思ひくわまへとつ世へ来[illegible]
まふ山するひ[illegible]のくさ[illegible]ゆ竹ひくふよ云てなまに
牙利学[illegible]さ海く教ひ乃事ハ思ひ出ハはく力を
みくんとそおたりーをみやと思ひし人よつ捨
ら迷くひりと思てまるをあれ行ゑ志ゑたいりく成
きんとあさ、のくて帝永

為然ふ学んなくされ川乃ちやさせよ

志くくみりけくたまあとくめ
とおりみ月ハ城はくくとおりめて
ちく孫、のをあきれ夕をわりう孫とも
朝のむる神り猫はゆそこかふ
とよめふみあきふくくあをりを大くこ乃ちくれ

学まよ海て神思ふ神れ上おりひ
やふ海をむ所を投ゆふをるの代魚ゑを所乃れた
さ山里　りを今をこひまを入く山りかさけ
学ち家あれ松けきけ名風の音いとんりそ名山田
乃い孫うふとそりうき女房あうくひ海ま孫志川く
ひさひまふんを見てあいまられんちしてなりま
おり月のあうき夜うちあうめて

我くくてうさ世れ中にめく学せ

なまくハちくむ月の都想

学よめふくくに山迷くを れ思うけわを捨くさ名あ
さまー文をうをたわれ行りと思ふをいをあをま
おりを雲ゆも成ぬ迷をいゆくむりれ雲と迷しくて

孫屋乃つまちゝ夫紅梅の色ゑれかりゝ思をはるや
世ゝのと花ゝわを見ゝよんとよせらまーやをゆさう
里ーはゝるひのたゝこゝ屋ゝはるやと我なゝゝ濃まーうふ
うそふ事一人ゝそあけまゝかのゝれ
越後ゝゝゝゝゝふゝるのあけわの
ゆて天狗あゝひゝけ思ゆゝ屋ゝきて出ーゆひゝ
うゝひ笑ゝ小聖ゑゝのゝとゝ乃素た思ひよせ屋ー
十　ゆ見乃うゝさはけ　比巻ゆめれうきゝ
空ゆふ事ーをきんしわゝ陣ゆゝわゝ乃ゝいゝ屋
ゝたゝー見い　角のゝいゝ世ゝあえゝゝたゝく生屋
ゝ毎ひゝ陣かゝちをひゝ家とゆ人いゝ裾たまひ
てはゝ海ゝのゝるゝとゝゝなくいゝゝをたゝ

事をゆめれ屋ゝく生ゝ一ゝ乃はあけを成ぜん
らーー義とゆ知ーてくゝをかゝ裾たまふゑ加やうに
ゝ義ゆ、をはゝゝいゝふを物語をゝそをむ毒う
ゝ見ゝゝ　ゝあなまいゆ見れうゝさはーゝいふゆゝ
あと義屋ゝ見ゝて義のうゝさゝゝといふゝ屋ゝそ
うのまゝゝよ大毒うゝゝいゝゝしゆひゝまゝゝひの
義乃男ひゝゝれかゝをゝの子をむゝれなくゝゝあゝ
めーいゝゝして津ゝゝ勢のふを使ゝくゝれ義をあま
ゆふ世ーゆ裾ゝゝあゝゝをこひ大ねのゝよ
越人ゝゝゝゝゝゝ大ゝゝゝゝゝれ哥ゝゝ
のゝ乃ーを生ゝゝゝあゝるみゝ城ゝゝ屋ゝく
おもゝねゝゝ海ゝゝゝ海ゝゝゝ加郷

空五―なるゝ乃所まそう思ひさなるゝ所
城まなるひの君れ乃うちはこそはゆゑめいるふ
そやあきまゐるやうまそ是事ゆ―とゐんゆはを
ゆをそ乃くちや面ちと云畑と人の所くりをさゆゆ
まをうゆあひくゆいめんきまへをとう賽きん
へ所ゆや接続をゆすゆてう乃ゆのなまをゆまをまを
あるま！をいゆ有利。

下終

南葵文庫